

伊方小学校遺跡(第2・3地点) 宝 珠 遺 跡

付 三本松古墳出土内行花文鏡

福岡県田川郡方城町所在遺跡の発掘調査報告書

1 9 9 7

方 城 町 教 育 委 員 会



(1) 宝珠遺跡出土 内行花文鏡



(2) 三本松古墳出土 内行花文鏡

序

田川郡の北端部に位置する方城町は、福智山系から派生する丘陵に立地しながら、遠賀川の支流である彦山川に面しており、地理的な条件には大変恵まれています。したがって、歴史的にも交通の要衝に位置し、各種の文化財が現在まで豊富に遺されています。

ここで報告する伊方小学校遺跡と宝珠遺跡は、福岡県指定史跡「伊方古墳」が立地する丘陵の南西端部に位置し、町道の拡幅工事に伴って発見されました。

伊方小学校遺跡では、弥生時代前期末の貯蔵穴や土墳墓と弥生時代後期後半の竪穴住居跡、宝珠遺跡では弥生時代前期末の貯蔵穴と弥生時代終末期の石棺墓が確認され、土器や石器や内行花文鏡が出土しました。いずれも、彦山川流域の弥生時代を考えるうえで重要な遺跡であり、埋蔵文化財に対する理解と認識の向上、さらには学術資料として広く利用していただければ幸甚です。

最後に、発掘調査に協力していただいた地元の方々をはじめ、ご協力とご指導を賜った福岡県教育庁指導第二部文化課および福岡県教育庁筑豊教育事務所に対し、心より厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

方城町教育委員会

教育長 渡 邊 健 司

例 言

1. 本書は、平成8年度に方城町が実施した、町道、広谷-犬星線の拡幅工事に伴う伊方小学校第2・3地点、および平成元～3年度に実施した、町道、役場-宝珠線の拡幅工事に伴う宝珠遺跡の発掘調査の記録である。なお、昭和30年に発見された三本松古墳の内行花文鏡についても併せて報告する。
2. 発掘調査および報告書作成は方城町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁筑豊教育事務所の援助を受けて実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、伊方小学校遺跡第2・3地点については福高教晃の補助を受けながら水ノ江和同が、宝珠遺跡については新原正典がそれぞれ作成した。
4. 本書に掲載した遺構写真は、伊方小学校遺跡第2・3地点については水ノ江和同が、宝珠遺跡については新原正典がそれぞれ撮影した。巻頭図版については九州歴史資料館石丸洋が、その他の遺物写真は水ノ江と北岡伸一が撮影した。
5. 出土遺物の整理・復原作業は九州歴史資料館で、実測作業および図面の浄書等は福岡県文化課太宰府事務所で行った。
6. 本書において使用した方位はすべて磁北である。
7. 本書の執筆は、伊方小学校遺跡第2・3地点については「1. はじめに一調査の経緯と組織」「2. 位置と環境」を福高が、その他を水ノ江が、宝珠遺跡については新原が、三本松古墳出土内行花文鏡については水ノ江がそれぞれ行ない、編集は新原の指示を受けながら水ノ江が実施した。

本文目次

	頁
I 伊方小学校遺跡第2・3地点	1
1. はじめに—調査の経緯と組織—	1
2. 位置と環境	2
3. 伊方小学校遺跡第2地点	5
(1) 発掘調査の概要	5
(2) 遺構と遺物	6
4. 伊方小学校遺跡第3地点	19
(1) 発掘調査の概要	19
(2) 遺構と遺物	20
5. 伊方小学校遺跡第3地点周辺の採集遺物	28
6. まとめ	28
(1) 伊方小学校遺跡第2・3地点について	28
(2) 伊方小学校遺跡第2・3地点および法華屋敷遺跡出土弥生土器の位置づけ	29
II 宝珠遺跡	
1. はじめに	33
2. 発掘調査の記録	34
(1) 発掘調査の概要	34
(2) 平成元年度の調査	37
(3) 平成2年度の調査	41
3. 小 結	44
III 宝珠遺跡発見の内行花文鏡	45
IV 三本松古墳出土内行花文鏡	51

図版目次

【巻頭図版】

- (1) 宝珠遺跡出土 内行花文鏡 (2) 三本松古墳出土 内行花文鏡

【伊方小学校遺跡第2・3地点】

- 図版1 (1) 伊方小学校遺跡 第2地点 全景, 1 (東から)
 (2) 伊方小学校遺跡 第2地点 全景, 2 (南西から)
 (3) 伊方小学校遺跡 第2地点 調査風景 (東から)
- 図版2 (1) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号貯蔵穴 (南西から)
 (2) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号貯蔵穴 土層断面 (南東から)

- (3) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号貯蔵穴 完掘状態(南から)
- 図版3 (1) 伊方小学校遺跡 第2地点 2号貯蔵穴(北西から)
(2) 伊方小学校遺跡 第2地点 2号貯蔵穴 遺物出土状態(北西から)
(3) 伊方小学校遺跡 第2地点 3号貯蔵穴(南西から)
- 図版4 (1) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号土墳墓. 1(南から)
(2) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号土墳墓. 2(南東から)
(3) 伊方小学校遺跡 第2地点 1号土墳墓 磨製石鍬出土状態(南西から)
- 図版5 (1) 伊方小学校遺跡 第2地点 2号土墳墓(南から)
(2) 伊方小学校遺跡 第2地点 3号土墳墓(南東から)
(3) 伊方小学校遺跡 第2地点 4号土墳墓(南西から)
- 図版6 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 全景(南東から)
(2) 伊方小学校遺跡 第3地点 調査風景. 1(北西から)
(3) 伊方小学校遺跡 第3地点 調査風景. 2(西から)
- 図版7 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号竪穴住居跡(南西から)
(2) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号竪穴住居跡 遺物出土状態(南から)
(3) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号竪穴住居跡 完掘状態(南西から)
- 図版8 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号貯蔵穴(東から)
(2) 伊方小学校遺跡 第3地点 2~4号貯蔵穴. 1(北から)
(3) 伊方小学校遺跡 第3地点 2~4号貯蔵穴. 2(西から)
- 図版9 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 2号貯蔵穴(南東から)
(2) 伊方小学校遺跡 第3地点 3号貯蔵穴(西から)
(3) 伊方小学校遺跡 第3地点 4号貯蔵穴(南東から)
- 図版10 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号土坑(北西から)
(2) 伊方小学校遺跡 第3地点 1号土墳墓(北から)
(3) 伊方小学校遺跡 第3地点 調査風景(南東から)
- 図版11 伊方小学校遺跡 第2地点 1号貯蔵穴 上部出土土器
- 図版12 伊方小学校遺跡 第2地点 1号貯蔵穴 下部・底面出土土器
- 図版13 伊方小学校遺跡 第2地点 2号貯蔵穴 出土土器
- 図版14 (1) 伊方小学校遺跡 第3地点 出土土器
(2) 伊方小学校遺跡 第2・3地点 出土土器・石器

【宝珠遺跡】

- 図版15 (1) 宝珠遺跡遠景(手前は彦山川 西から)
(2) 遺跡全景(東から)
(3) 遺跡全景(西から)
- 図版16 (1) 1号石棺墓(東から)
(2) 1号石棺墓(南から)
(3) 1号石棺墓刀子出土状態(東から)
- 図版17 (1) 2号石棺墓(西から)

- (2) 2号石棺墓(南から)
 (3) 3号石棺墓跡(西から)
- 図版18 (1) 4号石棺墓(東から)
 (2) 4号石棺墓(南から)
 (3) 5号石棺墓跡(南から)
- 図版19 (1) 6号石棺墓跡(南から)
 (2) 6号(右)・7号(左)石棺墓跡(南から)
 (3) 1号石棺墓出土刀子(実大)
- 図版20 (1) 平成2年度調査地点遠景(西から)
 (2) 平成2年度調査Bトレンチ(東から)
 (3) 1号貯蔵穴(右)・2号貯蔵穴(左)(南から)
- 図版21 (1) 平成元年度調査地点の現況(東から 平成9年1月撮影)
 (2) 昭和61年発見 内行花文鏡 出土地点の現況(北から 平成9年1月撮影)
 (3) 昭和61年発見 甕棺上甕(下)・下甕(右)

[三本松古墳出土内行花文鏡]

- 図版22 (1) 三本松古墳出土 内行花文鏡 (2) 三本松古墳出土 内行花文鏡 部分拡大

挿 図 目 次

[伊方小学校遺跡第2・3地点]

- 第1図 法華屋敷遺跡の現況(平成8年5月撮影)
 第2図 方城三菱炭礦建物跡(現.九州日立マクセル赤煉瓦記念館)
 第3図 周辺主要遺跡分布図(1/7,500)
 第4図 伊方小学校遺跡第2・3地点位置図(1/2,000)
 第5図 伊方小学校遺跡第2地点遺構配置図(1/100)
 第6図 1号貯蔵穴実測図(1/30)
 第7図 1号貯蔵穴上部(第1~12層)出土土器実測図.1(1/4)
 第8図 1号貯蔵穴上部(第1~12層)出土土器実測図.2(1/4)
 第9図 1号貯蔵穴下部(第13~15層)出土土器実測図(1/4)
 第10図 1号貯蔵穴底面(第16~18層)出土土器実測図(1/4)
 第11図 2・3号貯蔵穴実測図(1/30)
 第12図 2号貯蔵穴出土土器実測図.1(1/4)
 第13図 2号貯蔵穴出土土器実測図.2(1/4)
 第14図 2号貯蔵穴底面出土土器実測図(1/4)
 第15図 1~4号土壌墓実測図(1/30)
 第16図 1号溝出土土器実測図(92は1/4 93は1/3)
 第17図 伊方小学校遺跡第2地点出土土器実測図(1/2)

- 第18図 伊方小学校遺跡第3地点遺構配置図(1/100)
- 第19図 1号竪穴住居跡(左)および屋内土坑(右)実測図(1/60 1/30)
- 第20図 1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/4)
- 第21図 1号貯蔵穴実測図(1/30)
- 第22図 2～4号貯蔵穴実測図(1/30)
- 第23図 1～4号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)
- 第24図 1号土坑(左)および1号土墳墓(右)実測図(1/30)
- 第25図 伊方小学校遺跡第3地点出土土器実測図(1/2)
- 第26図 伊方小学校遺跡第3地点周辺採集土器実測図(1/4)
- 第27図 法華屋敷(1～7)・前村(8)・影塚東(5号袋状竪穴9～19)遺跡出土弥生土器(1/8)
- 第28図 伊方小学校遺跡第2・3地点の現況(平成9年1月撮影)

〔宝珠遺跡〕

- 第29図 宝珠遺跡調査位置図(1/1,500)
- 第30図 平成元年度調査石棺墓群配置図(1/100)
- 第31図 1・2号石棺墓実測図(1/30)
- 第32図 1号石棺墓出土刀子実測図(1/2)
- 第33図 3・4号石棺墓実測図(1/30)
- 第34図 5・6号石棺墓実測図(1/30)
- 第35図 平成2年度調査Bトレンチ配置図(1/200)
- 第36図 1・2号貯蔵穴実測図(1/30)
- 第37図 1・2号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)
- 第38図 貯蔵穴・トレンチ出土土器実測図(1/3)
- 第39図 内行花文鏡出土石棺墓配置略図
- 第40図 内行花文鏡実測図(1/1)
- 第41図 内行花文鏡拓影(1/1)
- 第42図 内行花文鏡写真(1/1)
- 第43図 甕棺実測図(1/12)

〔三本松古墳出土内行花文鏡〕

- 第44図 三本松古墳出土内行花文鏡拓影および実測図(1/1)
- 第45図 三本松古墳群跡地の現況(平成9年2月撮映)
- 第46図 方城町の位置

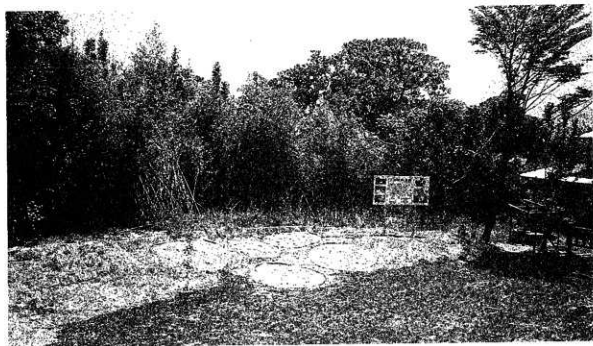
I ^{いかた} 伊方小学校遺跡第2・3地点

1. はじめに—調査の経緯と組織—

平成3年度に赤字再建団体から脱却した方城町では、町民の生活環境改善を目指して各種の事業を積極的に進めている。その中でも、町内の中心部に相当する伊方地区を貫通する町道、広谷・犬星線の拡幅と延長は、県道22号線、直方・田川バイパスや伊方小学校・方城中学校へのアクセスを円滑にするためにも、本町の最重要課題の一つである。

この町道、広谷・犬星線に関しては、平成7年度施工地区である大字伊方字前村において「法華屋敷遺跡」が発見され、平成7年11月に発掘調査が、平成8年3月には報告書も刊行されている。したがって、平成8年度は当初から拡幅の施工地区において事前の試掘調査を行ない、大字伊方3921番地と同3967-1番地において遺跡の存在が確認された。このため、方城町教育委員会では随時発掘調査を実施することになったが、伊方小学校内に所在あるいは近接するため、平成7年度に調査した「伊方小学校遺跡」に続いて前者を「伊方小学校遺跡第2地点」、後者を「伊方小学校遺跡第3地点」と命名した。

伊方小学校遺跡第2地点の発掘調査は平成8年7月30日から8月13日まで行なわれたが、炎天下の発掘作業であったため困難を極めた。調査面積は153㎡。検出された遺構には、弥生時代前期末に属する3基の貯蔵穴と4基の土墳墓の他に、中世に属する2本の溝がある。この中でも、1号貯蔵穴から出土した多量の弥生土器と1号土墳墓から出土した磨製石鎌は、当時の生活や社会を復原するうえで注目する遺物である。したがって、方城町教育委員会ではこの重要性を鑑み、夏休み期間中ではあったが、出校日の8月6日に伊方小学校の5・6年生を対象とした現地説明会を実施した。また、8月9日には報道関係に発表して、方城町民だけではなく筑豊地区に広く本遺跡の



第1図 法華屋敷遺跡の現況（平成8年5月撮影）

重要性を公表した。こうした中、1号貯蔵穴から出土したほぼ完形に復原できるであろう壺形土器が8月8日の未明に盗難に遭うという事態が生じたが、残念ながら現在に至るまでその所在は確認できていない。2号貯蔵穴についてはその1/3ほどが調査区に延びており、調査期間内に掘り上げることができなかったため、町道拡幅の工事に際して残った部分の調査を完結させた。

伊方小学校遺跡第3地点の発掘調査は、平成8年9月29日から10月12日まで行なわれた。ちょうど天候が不順な時期で、俄雨や雹などに見舞われ、また湧水も著しく困難な作業が続いた。調査面積は171㎡。検出された遺構は竪穴住居跡1軒、貯蔵穴4基、土壇墓1基、土坑1基、溝1本で、竪穴住居跡が弥生時代後期後半に属するだけで、他はすべて弥生時代前期末に属する。遺物は1号竪穴住居跡から土器や砥石が纏まって出土したが、その他の遺構からの遺物の出土は少ない。

この他にも、伊方小学校遺跡第3地点のさらに北東側の町道の延長線においても、本書で報告している弥生土器(第26図)が以前採集されていたので試掘調査を実施したが、伊方小学校関連の校舎や町道の歩道の建設に際して大きく削平されており、遺跡の存在は確認できなかった。

発掘調査および報告書作成に関する組織は以下のとおりである。

方城町建設課	課長	仲村 渡	方城町教育委員会	教育長	渡邊健司
	係長	香月 強	(社会教育課)	課長	桑野華人
	課員	竹下 靖		係長	永原芳博
				主査	中村月美
				主事	福高教晃
筑豊教育事務所	所長	寺島寛治			(調査・報告担当)
	副所長	石川元彬			
(生涯学習課)	課長	斎藤 晃			
	文化班主任	水ノ江和同	(調査・報告担当)		
	主事	藤原幸子			

なお最後になりましたが、発掘調査中においては、地域住民の方々をはじめ、方城町文化財専門委員の植田辰生・財津政義・永末宏之・高津勝春の各先生に多くの御指導・御助言を賜りました。また、嘉穂工業高等学校教諭の白石紀文先生、町道拡幅工事を行っていた円山工務店、さらに岩猿正志氏(方城町郵便局)には調査において様々な御配慮を賜りましたこと、併せてお礼申し上げます。

2. 位置と環境

方城町は田川郡の北端部に位置し、遠賀川の支流である彦山川と金辺川の合流地点にあって、東は田川市、西は赤池町、南は金田町、東北方向に福岡山系を背景に香春町および北九州市小倉南区に隣接する。

町域は南北に長く約7.3km、東西は最も広い所で約3.8kmで、総面積は18.38km²。標高は19mから791mにおよび、町の東北部は福智山系から派生する丘陵地帯で、南方向へ約30度の緩やかな傾斜、全般的には平坦地は少なく、起伏に富んだ地形となる。

方城町の由来は、明治維新前は小倉藩（小笠原）第二区第六小区に属し、畑村・伊方村・弁城村に分かれていたが、畑村と伊方村は明治20年土地総丈量の際に合併し

て伊方村と改称した。さらに、明治22年4月1日、町村制施行に際して再度合併して伊方村の「方」と弁城村の「城」の字を採り「方城村」となり、昭和31年8月1日の町政施行に際して「方城町」となり今日に至っている。

本町の基幹産業は農業であったが、昭和20年代の石炭産業の隆盛により、昭和35年頃までは農業従事者の石炭産業への流動が進展し、就業人口の約半分は第二次産業の従事者となった。平成6年度における方城町の人口は8,155人。

現在は、炭坑の町から九州日立マクセルを中心とした内陸性工業地域として、また筑豊・北九州地域のベッドタウンとして徐々に姿を変えていたが、県道22号線・田川―直方バイパスの開通を契機に、住宅開発や道路の整備がより急速に進められている。

方城町内の文化財は豊富で、福岡県指定天然記念物「定禅寺の藤」をはじめ、福岡県指定史跡の「伊方古墳」「弁城岩屋厩崖梵字曼陀羅」等があり、町民の文化財に対する意識も高い。この他にも、伊方小学校に近接する赤煉瓦造りの旧三菱方城炭礦（現九州日立マクセル）は、石炭産業の発展を象徴する代表的な近代化遺産の一つとして1905（明治37）年頃に建設されている（第2図）。

弥生時代の遺跡としては、今回報告されている石棺墓から内行花文鏡が出土した弁城地区の宝珠遺跡や草場遺跡をはじめ、すでに報告済みの法華屋敷遺跡や迫・野添石棺墓群等が有名である。

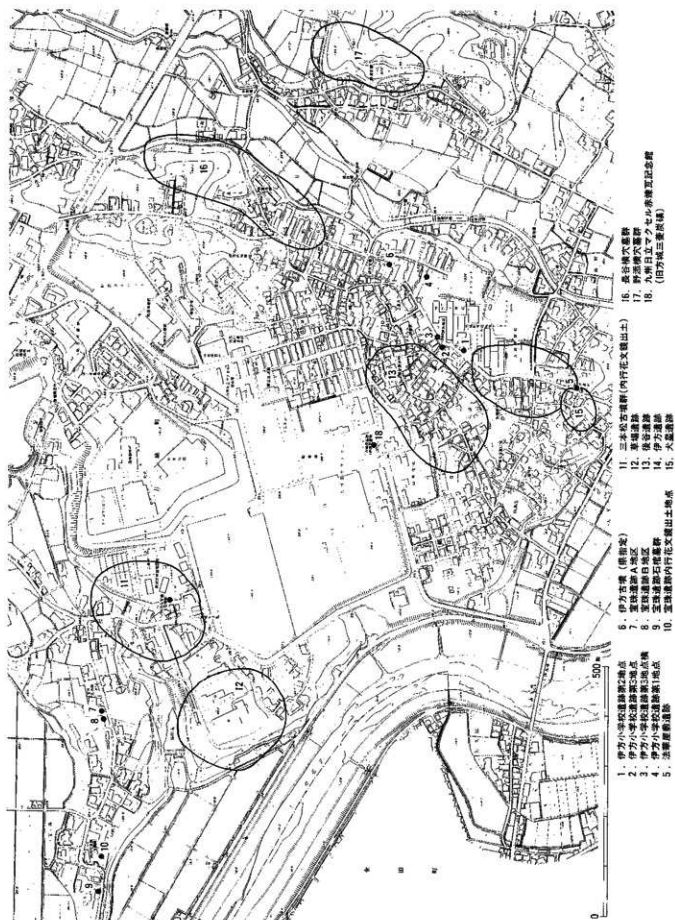
古墳時代の遺跡としては、町内に広く横穴墓が分布するが、中でも迫横穴墓群・野添横穴墓群・長谷横穴墓群等は規模が大きい。古墳としては、迫古墳・高崎古墳・三本松古墳等があるが、中でも県指定史跡になっている伊方古墳は石室長11m以上の複式の横穴式石室で、田川地区最大の石室を有する古墳として注目される。

また、岩屋古窯（通称「高麗窯」もしくは「古上野唐人窯」）と呼ばれる近世上野焼の窯跡も弁城地区にあるが、発掘調査等が実施されたことはなく詳細はわかっていない。

このように、方城町では古代から近・現代に至るまで多くの文化財が豊富に存在している。特に、今回の発掘調査が実施された伊方地区の丘陵は、弥生・古墳時代を中心に中世・近世の城跡も存在し、町内でも遺跡の質・量が卓越した地区である。したがって、今後に予定された開発行為に対しては、関係各所と綿密で慎重な協議を重ね、遺跡の保存に努めることが強く望まれよう。



第2図 方城三菱炭礦建物跡（現 九州日立マクセル赤煉瓦記念館）



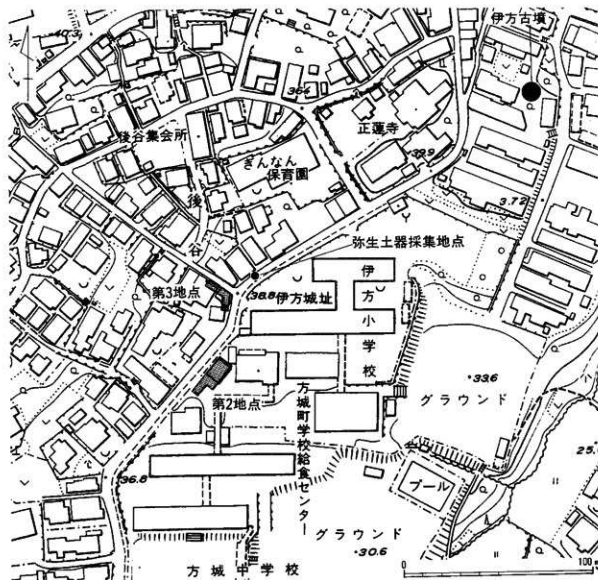
第3圖 周辺主要遺跡分布圖 (1/7,500)

3. 伊方小学校遺跡第2地点

(1) 発掘調査の概要

伊方小学校遺跡第2地点は、福岡県田川郡方城町大字伊方字3921番地に所在し、遠賀川水系彦山川に面しながら、福岡山系から派生する細長い丘陵の先端部中央（標高37m）に立地する。周辺には、前村遺跡・後谷遺跡・犬星遺跡・伊方遺跡・伊方小学校遺跡・法華屋敷遺跡といった弥生時代から古墳時代にかけての周知の遺跡が多数点在しており、方城町においても最も遺跡の密集する地区の一つである（第3図）。

前述したように、伊方小学校遺跡第2地点は町道、広谷-犬星線拡幅およびそれに伴う伊方小学校厚生会の建て替え工事に際し、平成8年7月30日の事前の試掘調査によって発見された。平成7年11月には、この地点から南へ250mの同じ町道、広谷-犬星線の拡幅工事で法華屋敷遺跡が発見・



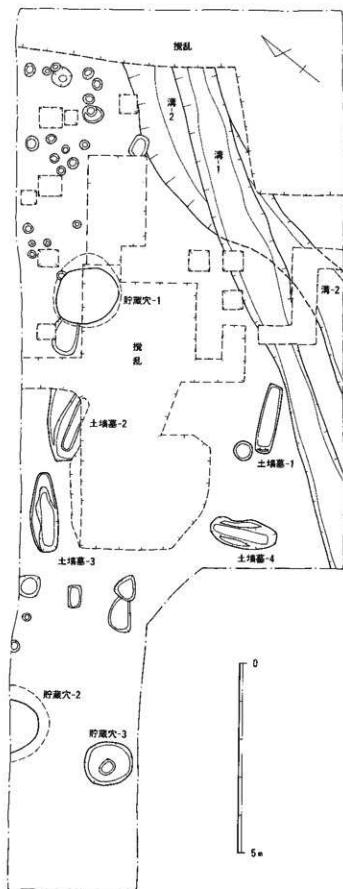
第4図 伊方小学校遺跡第2・3地点位置図（1/2,000）

調査されていることから、本遺跡の存在はある程度予想されていた。そこで、この遺跡の重要性を考慮した方城町教育委員会では方城町建設課と協議の結果、ちょうど夏休み期間中で生徒の授業に影響がないことから、このまま表上の除去作業を継続させ緊急に発掘調査を実施することにした。発掘調査面積は153㎡。

同年8月13日に調査が終了した後、直ちに町道の拡幅工事等は実施されることとなったが、方城町教育委員会では伊方小学校内より遺跡が発見された事実を学校教育にも活かし、文化財保護の思想を啓発させるためにも、調査跡地に遺跡を説明する看板を設置を迅速に決定した。

(2) 遺構と遺物

伊方小学校遺跡第2地点は、旧厚生会建物の跡地であったため、その基礎や水道管・排水管等の埋設によりかなりの攪乱が入っていたものの、弥生時代前期末に属する3基の貯蔵穴と4基の土壌墓、それに中世の溝2本が検出された。特に、1・2号貯蔵穴の出土遺物は多く、また人体に貫入していたと考えられる磨製石鏃の出土した1号土壌墓の存在は多に注目される。なお、竪穴住居跡も近辺に当然存在していたはずであるが、本調査区内では確認することはできなかった。

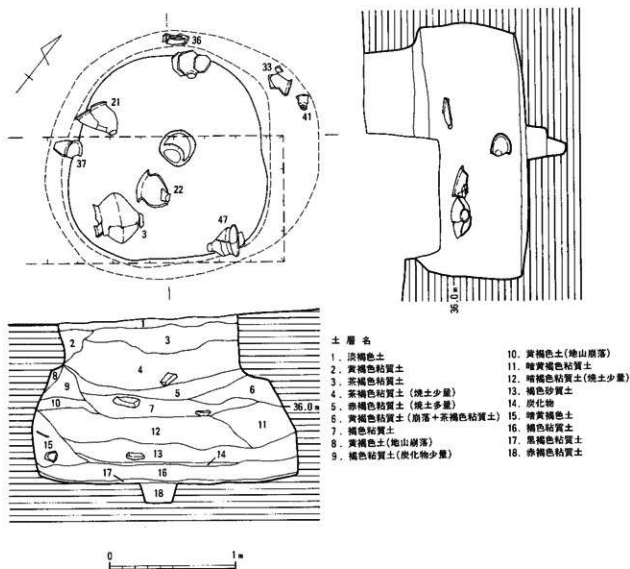


第5図 伊方小学校遺跡第2地点遺構配置図(1/100)

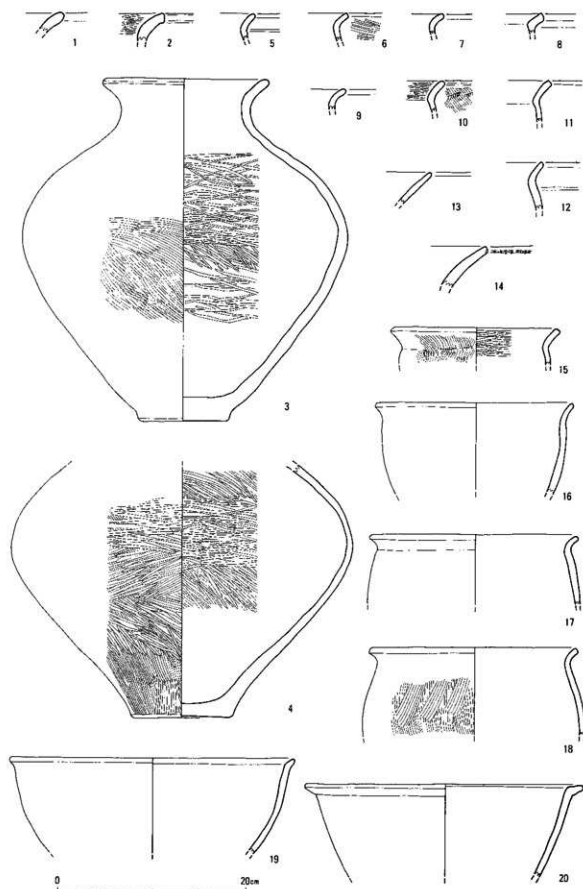
1号貯蔵穴 (図版2 第6図)

1号貯蔵穴は調査区中央部のやや北西寄りに位置し、東側の上部60cmほどは攪乱により削平されている。検出面の平面プランは径165×160cmのほぼ円形で、約40cmほど下がったところからオーバーハングして袋状(フラスコ状)に広がり、深さ130mで至る底面は215×210cmのやはり円形を呈する。底面には径25cm、深さ30cmの小柱穴が検出された。調査では北東-南西方向に畦を残しながら掘り進め、随時土層の観察を行なった。所々で壁が崩落したものと考えられる黄褐色土がブロック状に見られ、完形もしくはそれ近くまで復元できる弥生土器も多く見られた。焼土が多量に含まれるのは第5層と第12層で、炭化物が薄く広がる第14層の段階ではすでに貯蔵穴としての機能が終了していたものと考えられる。最下面の第17層は黒褐色粘質土で薄く全面に広がっている。遺物の出土はパンケース5箱にも及んだが、炭化米の存在は確認できなかった。

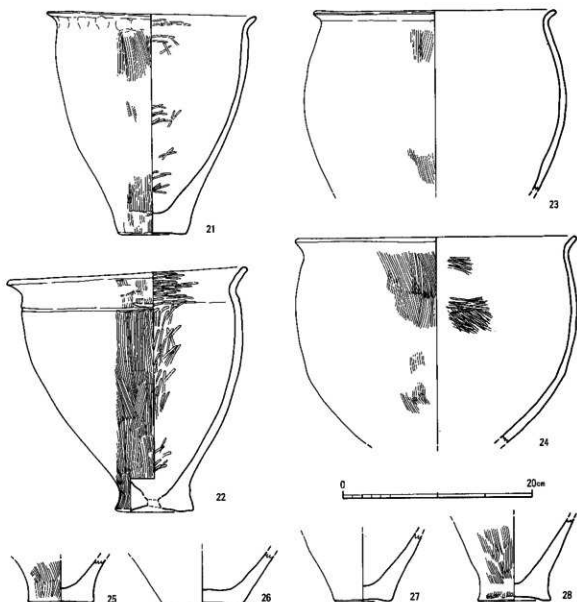
遺物は第1～12層まではほぼ満遍なく多量の土器が投棄された状態で包含されていたため、これらを纏めて「上部」として取り上げた。炭化物が薄く広がる第14層の上面である第13層には面的に遺物の出土が見られたので、第13～15層を「下部」として一括して取り上げた。また、底面に貼り付



第6図 1号貯蔵穴実測図(1/30)



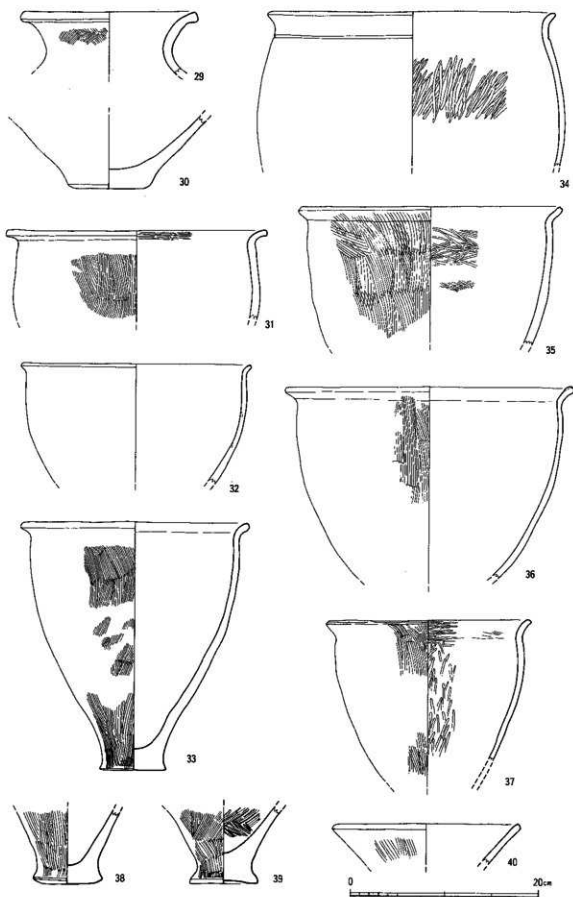
第7图 1号貯藏穴上部(第1~12層)出土土器実測図. 1 (1/4)



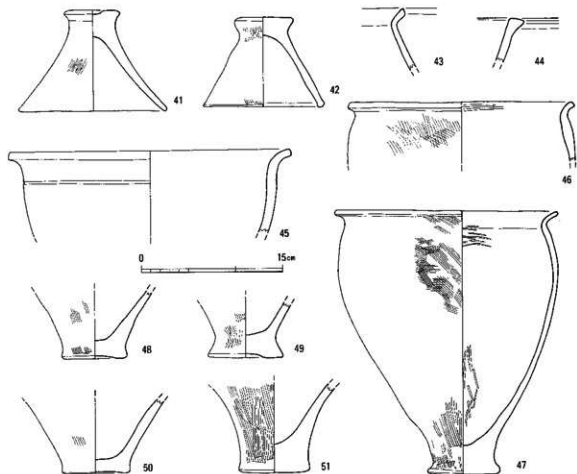
第6図 1号貯蔵穴上部(第1~12層)出土土器実測図、2(1/4)

くような状態でもある程度纏まった遺物の出土を見たので、これは「底面」として纏めて取り上げた。ここでは「上部」「下部」「底面」のそれぞれに分けて図示している。ところで、第7図3の壺形土器の胴部は反転による復原図であるが、第6図の出土状況図にあるように当初はほぼ完形に復原できる資料であった。しかし、調査の途中でその大部分が盗難にあい、残った胴部破片だけで図示した。

遺物(第7~10図・第17図2・3・5・7) 1~28は上部出土土器である。壺は1~4の4点に限られ点数は少ない。3の壺は復原口径17cm、器高36cm、最大腹径34cmを測り、外面の胴部にはハケが、それより上部ではナデが施されるが、底部付近は摩滅により器面調整不明。内面はハケの後に粗いミガキが施される。5~12は甕の口縁部で、頸部に1本の沈線文が施されるものもあるが、口縁端部が刻まれるものはない。13・14は口縁部が大きく開く鉢で、14については口縁端部に刻まれるが、いずれも摩滅が著しく器面調整不明。15~24は口径が復原できる一群で、多くは如意形の



第9图 1号貯藏穴下部(第13~15層)出土土器実測図(1/4)



第10図 1号貯蔵穴底面（第16～18層）出土土器実測図（1/4）

口縁部形態を早し胴部がわずかに緩やかに張る形態であるが、19・20のように「く」字状に短く屈折するものや、23・24のように器高に対して口径や腹径が比較的大きいものもある。摩滅や二次加熱による器面の剥落のため器面調整が不明なものも多いが、外面についてはハケ、内面については粗いミガキが施されるのが一般的である。22の底部には焼成後の穿孔があり、甔としての機能を有していたものと考えられる。底部は径6～8cmの平底で、わずかに上底になるものもあるが、弥生中期的な様相は見られない。18・20・24・27・28で二次加熱による変色等の痕跡が窺える。第17図7は上部出土の輝緑凝灰岩製の石庖丁であるが、全体的に調整が粗くまた刃部も十分に作り出されていないことから未成品と考えられる。

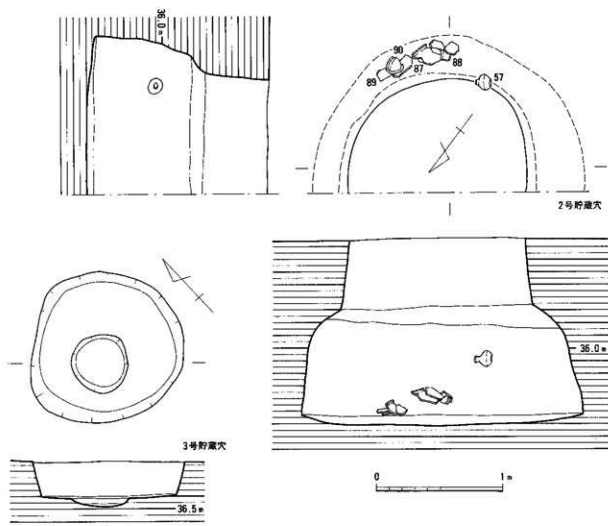
29～40は下部出土の一群である。29・30は壺の口縁部と底部。底部には二次加熱による変色が窺える。31～39は甕で、上部出土の甕とほとんど同じ様相を呈する。すなわち、器面調整に関しては外面がハケであるのに対して、内面には粗いミガキが施される。口径も25～30cmの範囲に収まり、1本の沈線文を頸部に施すものもあるが、口縁端部に刻目を施すものはない。二次加熱が窺えるのは33・36・37・39。40は口径20cmの口縁部が直線的に開く小型の鉢で、外面にはハケ目が窺える。第7図5は下部出土の粘板岩製の石庖丁で、刃部は直線的に作り出される。

41～51は底面に貼り付くような状態で出土した一群。41・42は壺の蓋であるが、41は口径16cm、42は13cmと比較的小さい。いずれも摩滅が著しいが、外面にはハケが窺え、42については二次加熱

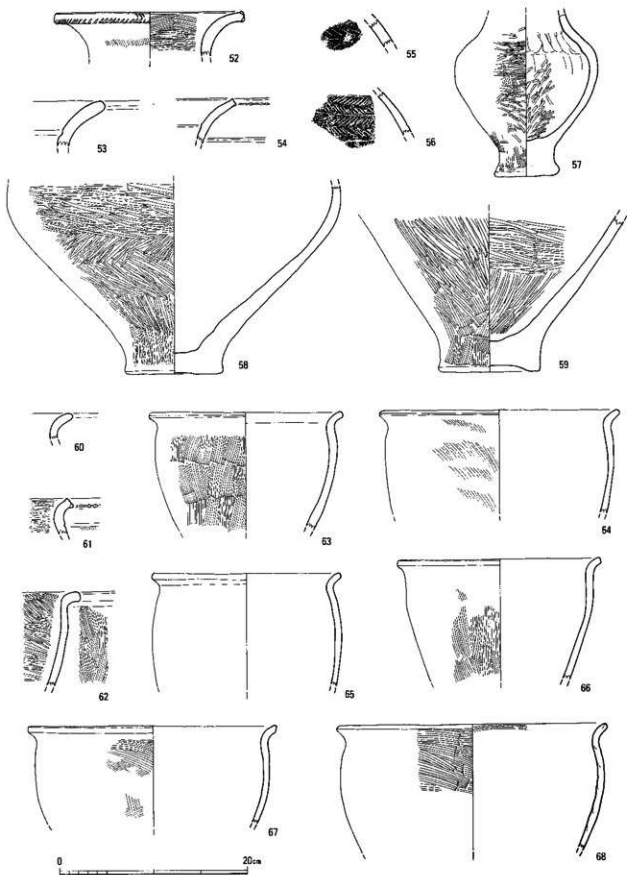
の痕跡が窺える。43～51は壘で、43のように強く胴部が張るもの、44のように突起状のものが口縁部に付くものもある。壘の器面調整は上部・下部の壘と同様で、外面にはハケ、内面には粗いミガキが施される。49の底部は外側に広がり、わずかに上底になる。二次加熱が窺えるのは47～51。第17図2・3は最下層出土で、2は頁岩製の砥石、3は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。

2号貯蔵穴 (図版3 第11図)

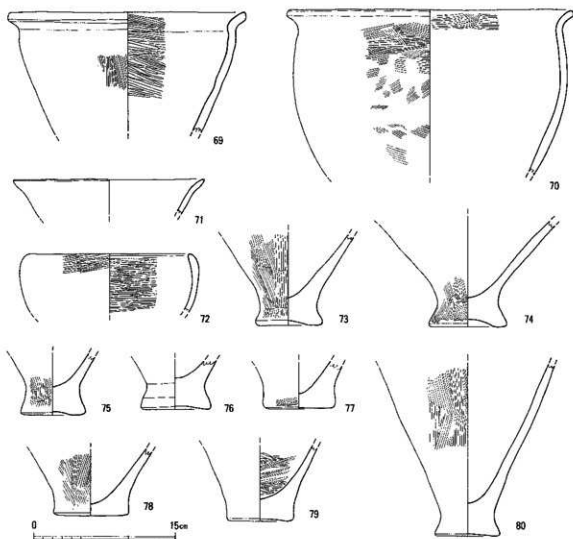
2号貯蔵穴は調査区の南西端で、1号貯蔵穴の南西11m、3号貯蔵穴の北西2mに位置する。全体の1/3程度が調査区外に延びていっているようであるが、検出面の平面プランは径140cm程度のほぼ円形を呈していたと考えられる。検出面から約50cmほど下がったところからオーバーハングして袋状(フラスコ状)に広がり、深さ145cmで至る底面は径220cmのやはり円形を呈する。底面には柱穴や壁溝等は確認されなかった。湧水が著しく壁の崩落も伴い、また貯蔵穴の狭さからも発掘作業は困難であった。したがって、土層の確認は十分にできていないが、1号貯蔵穴と同様に焼土の層が検出面から下へ60cmと110cmの2カ所で観察されたが、遺物の出土は少なく破片も比較的小さかった。ただし、底面に近い最下層では比較的大きく復原できる土器が纏まって出土しており、遺物の出土状況については1号貯蔵穴とは異なった様相を見せる。遺物の取り上げは底面に接した最



第11図 2・3号貯蔵穴実測図(1/30)



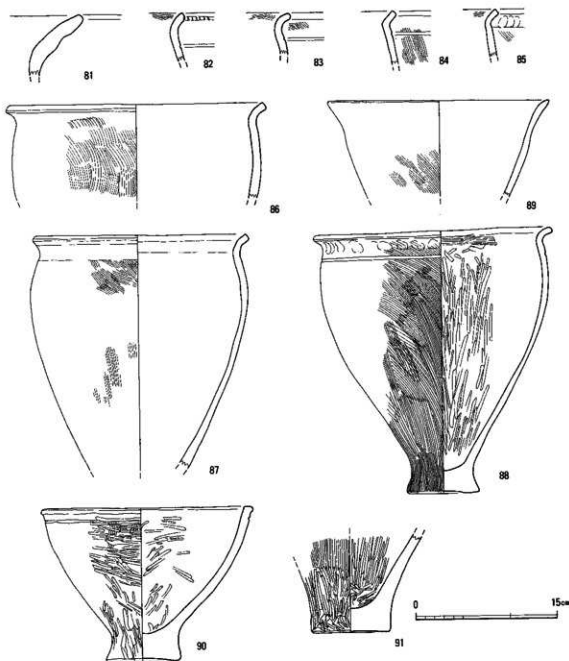
第12圖 2号貯藏穴出土土器実測図. 1 (1/4)



第13図 2号貯蔵穴出土土器実測図、2 (1/4)

下層とそれ以外とに分けて行ない、実測図もそれに準じて分けて纏めている。この貯蔵穴の残り1/3については、町道の拡幅工事に際して追加調査を実施したが、著しい湧水と壁の崩落により危険が生じたため遺物の取り上げだけしか実施できず、図面等による記録までには及ばなかった。

遺物(第12~14図) 52~80は底面に接する最下層以外から出土した一群である。52~59は壺で、器面調整は基本的にはハケ後にミガキが内外面ともに施される。52の口縁端部の刻目は、下端部は全周に、上端部は部分的にしか施されない。53・54の口縁部の内面には段やそれを意匠した沈線文が施される。55・56は胴部に施された文様で、55は横位の沈線文後の綾杉文と重弧文が、56はやや横位沈線文後の綾杉文が見られる。57は口縁部を欠く小型の壺で、小さい割には分厚くて甕のような底部を有するのが特徴的。58・59の底部付近の器面調整はミガキであるが、59のように外面の底部にはミガキが施されずにハケがよく残る。60~70は甕であるが遺存状態はあまり良くなく、口径はすべて反転復原によるものである。61は口縁部の下端部が刻まれ沈線文も施されるが、これ以外は無文である。器面調整がわかるものについては、外面にはハケ、内面には粗いミガキが施される。71は口縁部が大きく開く復原口径20cmの比較的小型の鉢。72は口縁部が内湾する復原口径18cmの鉢で、器形的には珍しい。内外面ともにミガキが施される。73~80は甕の底部で、内面の器面調整が観察されるものについては大部分がナデであるが、一部にはミガキも窺える。二次加熱による



第14図 2号貯蔵穴底面出土土器実測図(1/4)

変色や器面の剥落が見られるのは63・68・71・76・78・80で、62・66には炭化物が付着する。第17図6は粘板岩製の石庖丁で、厚さは最大でも4mmと薄く、刃部は片刃になる。

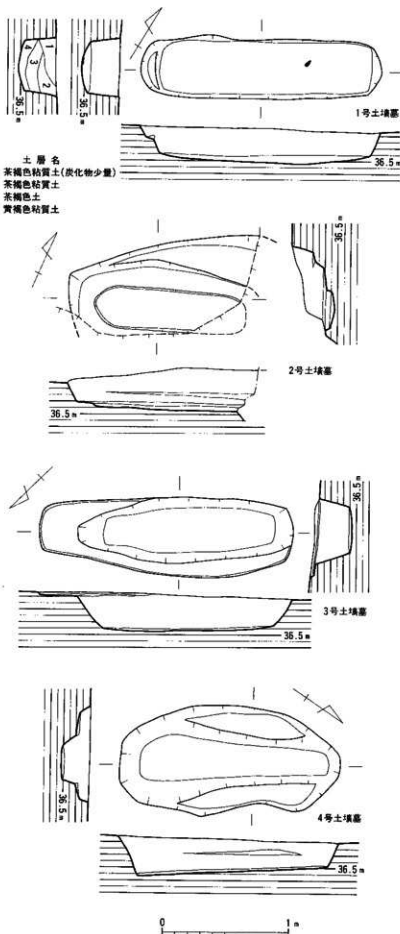
81～91は底面に貼り付いていた、あるいはそれに接した最下層より出土した一群である。81が壺の口縁部、また89・90が鉢である以外はすべて甕である。82の口縁端部には刻目が、82～84・88・90には頸部に沈線文が施される。88はほぼ完形に復原できる甕で、外面と口縁部の二面にはハケが、内面には粗いミガキが施され、外面の頸部には強い指頭圧痕が残る。89は口縁部が直線的に開く鉢。90の鉢は器形的には口縁部のない甕といった感じであるが、外面にミガキが施されていたり二次加熱の痕跡がないことから、甕とは異なった用途を前提に制作されたものと考えられる。91は外面の底部付近にのみ、珍しくミガキが施される。81～91の中で二次加熱が見られるのは87だけである。

3号貯蔵穴 (図版3 第11図)

3号貯蔵穴は調査区の南西端で、1号貯蔵穴の南西12m、2号貯蔵穴の南東2mに位置する。検出面での平面プランは径120cmのほぼ円形で、深さ25cmで径105cmの円形の底面に至る。底面の中央部やや南寄りに、径40cm、深さ8cmの浅い穴を確認した。この遺構は平面規模や深さから土坑という認識で掘り進めたが、埋土が他の貯蔵穴とはほぼ同様であったことから、取り敢えず貯蔵穴として位置づけた。出土遺物は小片の弥生土器が少量出土しただけで、図示できるものはなかった。

1号土墳墓 (図版4 第15図)

1号土墳墓は調査区中央部の東寄りで、2号土墳墓の南東10m、4号土墳墓の北西5mに位置する。189×48×27cmの長軸両端部がやや丸くなる長方形の平面プランで、南西端部のみ28×7cmの三日月状のテラスが作られる。底面はほぼ長方形で、両端部と中央部のレベル差は6cmを測る。埋土はおおかた黄褐色の粘質土で、第1層にのみ炭化物がわずかに含まれる。土墳墓としての認識はその形態から生まれていたが、人骨



第15図 1～4号土墳墓実測図 (1/30)

等の出土がなかったため当初はその確信が持てなかった。ところが、底面に至り、それに貼り付くように北西端から中央方向50cmのところで第17図1の完形の磨製石鏃が出土したため、土墳墓と認定することができた。すなわち、本土墳墓には、戦闘等に際し磨製石鏃を装着した弓矢が胸部付近に貫入して、あるいはこれが致命傷となり、この磨製石鏃が体内に残存したままの人物が埋葬されたものと考えることができるのである。H川地域においては初例であり、注目される事例である。

遺物（第17図1） この磨製石鏃は、長さ5.9cm、基部の幅2.7cm、厚さ3mmを測る。先端部両側2/3の縁辺には細かい刃毀れが見られ、また一部に研磨の痕跡が窺える。

2号土墳墓（図版5 第15図）

2号土墳墓は調査区中央部の西寄り、1号土墳墓の北西10m、3号土墳墓の北東1mに位置する。掘乱によって大きく削平されており、全体像は不明。北側に1段テラスが付き変則的な平面プランになるが、基本的には長方形の掘りかたの中にやはり長方形の主体部が掘られる形態を呈する。北側のテラスは幅38cm、深さ25cm。主体部は幅32cm、深さ5cmで、長さは115cmまで測れたが、東端部の状況からこれ以上はそれほど長くならないものと考えられるが、遺物はまったく出土しておらず、埋土は黄褐色粘質土である。

3号土墳墓（図版5 第15図）

3号土墳墓は調査区中央部の東寄り、2号土墳墓の南西2m、4号土墳墓の北東5mに位置する。本来は平面プランが長方形になるテラス（段）を有する土墳墓であったと考えられるが、削平によりテラスは全体の3/4程度の $198 \times 58 \times 3$ cmしか遺存していない。主体部は 170×51 cmの北東端が幅30cmほどに狭くなる長方形プランで、深さは北東端部が26cm、南西端部が21cmと、5cmほどの傾斜が見られる。埋土はやはり黄褐色粘質土で、遺物の出土はない。

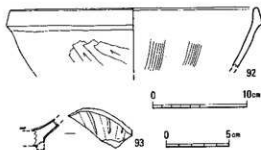
4号土墳墓（図版5 第15図）

4号土墳墓は調査区中央部の東寄り、1号土墳墓南西5m、2号土墳墓の南10m、3号土墳墓の南東10mに位置する。平面プランは不定形な楕円形に近い長方形で 172×88 cmを測り、長軸の両側に長さ90～110cm、幅15cm程度のテラスを有する。主体部の底面は長さ149cmで、北西端部の幅は北西20cm、深さ19cm、南東端部の幅は35cm、深さ30cmとなり、北西から南東方向に向かって広がり深くなっていく。頭位方向に関係した構造であろうか。埋土はやはり黄褐色粘質土で、遺物の出土はない。

1号溝（図版1 第5図）

1号溝は調査区東側で、北東から南西への走行方向でほぼ直線的に約28mに亘って検出された。幅は1.3～2.4mで、深さは25～35cmを測る。埋土は略褐色粘質土で、遺物は弥生時代から中世までの土器を中心にポリ袋1枚分が出土した。出土遺物から13世紀を若干前後する時代に所属するものと考えられる。

遺物（第16図・第17図4） 第16図92は復原口径26mの土師質の握ね鉢である。口縁部を玉縁状に肥厚させたもの。内面には幅15mm前後のハケを放射状に入れる。調整は口縁部および内面が横ナデ、胴部外面には手持ちヘラケズリが粗く施される。淡黄色軟

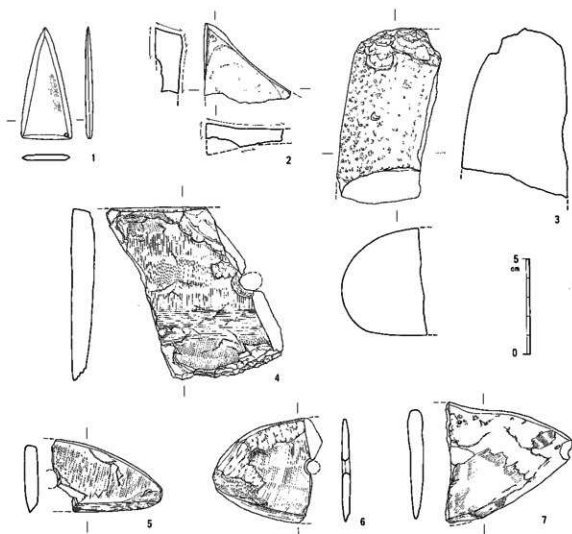


第16図 1号溝出土土器実測図（92は $\frac{1}{4}$ 93は $\frac{1}{2}$ ）

質の胎土。93は龍泉窯系の青磁の椀で、底部付近をわずかに残す。厚い底部から体部が湾曲する器形に復原できる。外面に片切り彫りによる鎬蓮弁を残す。灰白色の胎土に青灰色ガラス質釉を全面にかける。内底部に目跡が認められる。第17図4は輝緑凝灰岩製の大型の石庖丁（通称「バカ庖丁」）で、厚さは1.3cm。刃部から基部までは約9cm。両面ともに丁寧な研磨が施され、刃部は階段状剥離が著しくその様子が窺えない。

2号溝（図版1 第5図）

2号溝は調査区東側で、北東から南西方向への走行方向で、若干蛇行するように約16mに亘って検出された。幅は最高で5m、深さ20cmを測るが、1号溝に大きく切られるため、切られた部分については底面はまったく遺存しない。埋土は暗褐色粘質土、遺物は弥生時代の土器を中心にポリ袋1枚分が出土した。



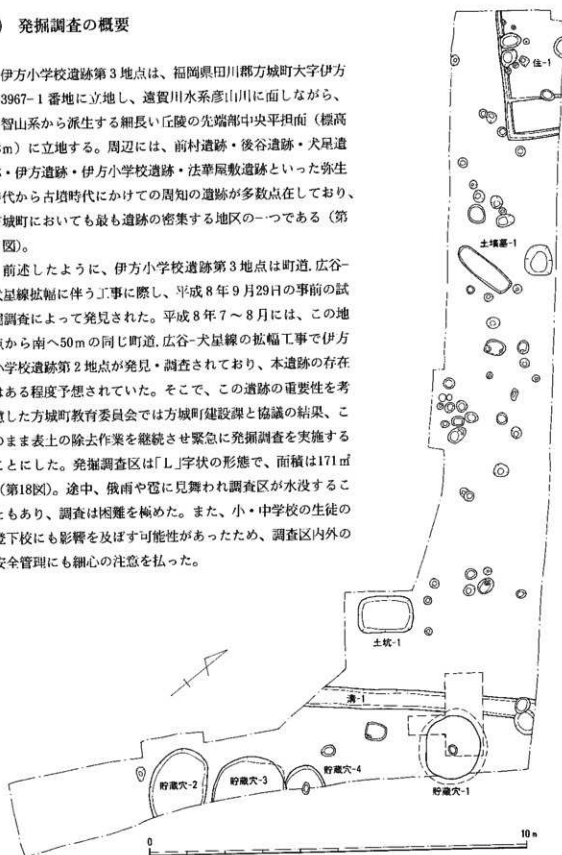
第17図 伊方小学校遺跡第2地点出土石器実測図（1/2）

4. 伊方小学校遺跡第3地点

(1) 発掘調査の概要

伊方小学校遺跡第3地点は、福岡県田川郡方城町大字伊方字3967-1番地に立地し、遠賀川水系彦山川に面しながら、福智山系から派生する細長い丘陵の先端部中央平坦面（標高38m）に立地する。周辺には、前村遺跡・後谷遺跡・犬尾遺跡・伊方遺跡・伊方小学校遺跡・法華庵敷遺跡といった弥生時代から古墳時代にかけての周知の遺跡が多数点在しており、方城町においても最も遺跡の密集する地区の一つである（第3図）。

前述したように、伊方小学校遺跡第3地点は町道、広谷-犬星線拡幅に伴う工事に際し、平成8年9月29日の事前の試掘調査によって発見された。平成8年7～8月には、この地点から南へ50mの同じ町道、広谷-犬星線の拡幅工事で伊方小学校遺跡第2地点が発見・調査されており、本遺跡の存在はある程度予想されていた。そこで、この遺跡の重要性を考慮した方城町教育委員会では方城町建設課と協議の結果、このまま表土の除去作業を継続させ緊急に発掘調査を実施することにした。発掘調査区は「L」字状の形態で、面積は171㎡（第18図）。途中、俄雨や雹に見舞われ調査区が水没することもあり、調査は困難を極めた。また、小・中学校の生徒の登下校にも影響を及ぼす可能性があったため、調査区内外の安全管理にも細心の注意を払った。



第18図 伊方小学校遺跡第3地点遺構配置図（1/100）

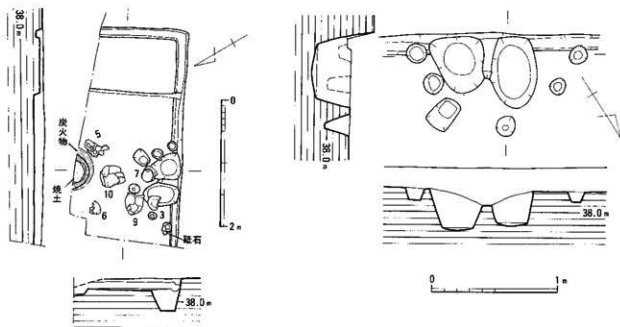
同年10月12日に調査が終了した後、直ちに町道の拡幅工事等は実施されることとなったが、方城町教育委員会では町民の文化財保護思想の啓発に活用するため、調査跡地に遺跡を説明する看板の設置を迅速に決定した。

(2) 遺構と遺物

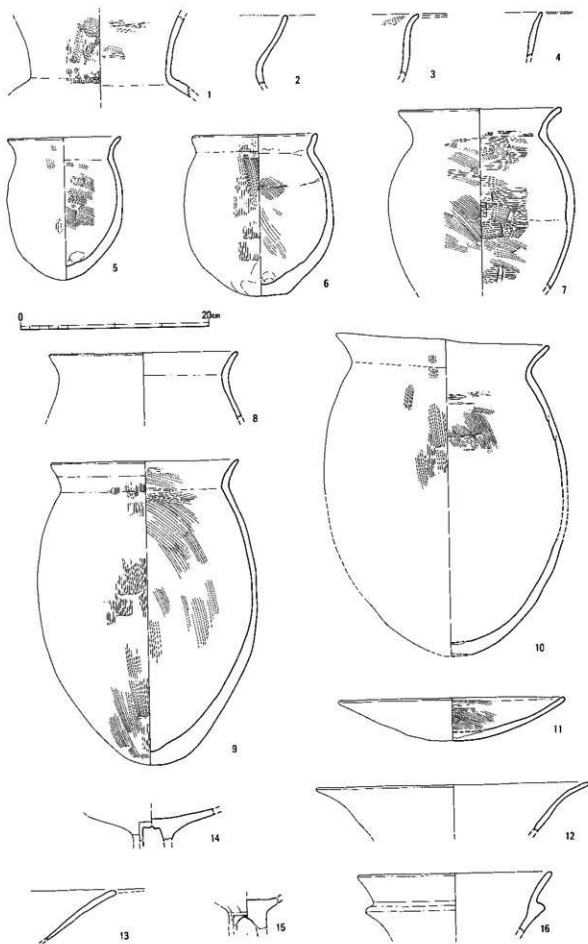
伊方小学校第3地点は民家等の跡地であったが攪乱は予想以上に少なく、電信柱関連の攪乱がわずかに確認されただけである。検出された遺構としては、弥生時代後期後半に属する竪穴住居跡1軒、弥生時代前期後半に属する貯蔵穴4基と土壇墓1基と溝1本、それに時期不明の土坑1基が検出された。特に、1号竪穴住居跡の出土遺物はかなり纏まっているが、本遺跡が立地する丘陵では以前から弥生時代後期後半に属する土器が多数採集されており、これらとの関連性が注目される。なお、本調査地点においても、弥生時代前期後半～中期前半に属する竪穴住居跡はやはり確認することができなかった。

1号竪穴住居跡（図版7 第19図）

1号竪穴住居跡は「L」字状調査区の西端部に位置する。本来はベッド状の高まりを有する長方形を呈していたと考えられるが、町道や建物によって大きく3/4ほどが削平され、遺存していたのは東西3.4m、南北1.7mにしかすぎない。壁高は最高で16cm。東壁には幅1.0mのベッドが地山の削りだしによって作られ、幅12cm、深さ5cmの溝が壁際に巡る。南壁の中央部に相当すると考えられる地点には、85×54×33cmの屋内土坑が作られる。2つのビットが組み合わさったような構造で、径14～25cm、深さ9～20cmの小ビットが6つ巡るという特徴が見られる。埋土には焼土や炭化物は含まれておらず、上部から第25図1の砥石が出土した以外は他にほとんど遺物が見られなかった。この竪穴住居跡の長軸線上中央部に相当すると考えられる地点には、径55cm程度の炉跡が検出され、その内部には焼土が、周辺には炭化物が広がる。主柱穴や貼り床は確認できなかったが、主柱穴に



第19図 1号竪穴住居跡（左）および屋内土坑（右）実測図（1/60 1/30）



第20图 1号竖穴住居跡出土土器実測図(1/4)

については本来堅穴住居跡の長軸線上に2つあったものと考えられるが、その位置は調査区外に相当するため検出できていない。遺物は比較的纏まって出土したが、いずれも床面から5~10cm浮いた状態で、しかも完全に完形に復元できるものも存在しないことから、これらの遺物はこの堅穴住居跡が廃絶した後に破損品が投棄されたものと考えられる。出土遺物から、本堅穴住居跡は弥生時代後期後半に属しよう。

遺物(第20図・第25図1・2)1は復原径15cmの壺の頸部で、内外面ともにハケがわずかに窺える。2はやや内湾する口縁部であるが、器形的には壺になろうか。3~9は甕で、口径が12~14cmと20cm前後の2つに大きく別れる。器面調整の確認されるものに関してはすべて内外面ともハケが施され、口縁端部は舌状に作られる。底部はいずれも1cm以上で分厚くなるが、6がわずかに平底状に平坦面を有する以外はすべて九底になっている。6・7・9・10には炭化物の付着が、6・10については二次加熱による変色が窺える。11はこれで完形品になる皿形土器で、高杯の坏部ではない。内面はハケが施され、外面は摩滅して器面調整が窺えないが、特に底部の接地面については著しく擦れたような痕跡が残る。12~15は高杯で、摩滅が著しく器面調整はいずれも不明。12の復原口径は29cm。14・15の脚部径は4cm。16はあるいは二重口縁壺の一種であろうか。摩滅により器面調整は不明だが、復原口径は20cm。高杯にしては分厚く、また口縁部の立ち上がりも直線的すぎるようである。第25図1・2はいずれも砥石であるが、1は屋内土坑の上部より出土した粘板岩製の端部のみが残る。2は白岩製の破損した後も、何度か再加工して使用している。

1号貯蔵穴(図版8 第21図)

1号貯蔵穴は「L」字状調査区の屈折部に位置し、南3mには4号貯蔵穴が、西3mには1号土坑がある。電柱関連の埋設物により大きく削平を受けているが、105×100cmのほぼ円形を呈する平面プランで、約30cmほど下がったところから緩やかにフラスコ状に広がっていき、検出面から約85cmで底面に至る。底面プランは径120cmの円形を呈し、その中央部には径20cm、深さ8cmの小ビットが掘られる。遺物はポリ袋1枚程度と少なく、またいずれも小破片で摩滅も著しい。埋土には焼土や炭化物はほとんど含まれておらず、また分層もできない暗褐色土がかなり締まって堆積していたことから、おそらくこの貯蔵穴は自然に埋まったり生活用具(土器・石器)の廃棄場所となったのではなく、一気にならざるに埋められたものと考えられる。

遺物(第23図17)第23図17は唯一図示できる遺物で、径7cm程度の底部である。端部が外側へ張り出すのが特徴的で、二次加熱による変色が窺える。

2号貯蔵穴(図版8・9 第22図)

2号貯蔵穴は「L」字状調査区の南部分に位置し、3号貯蔵穴とは北側20cmの距離に接する。3・4号貯蔵穴と同様に町道や堀に削平されるが、本来の平面プランは130×95cm程度の隅丸方形を呈していたと考えられる。深さは最高で32cm。底面中央部ではビットが検出されてなく、壁は直線的にわずかに開きながら立ち上がる。埋土は淡黄褐色土であるが、底面付近では締まりの良い地山に近い褐色土が堆積していた。出土遺物はポリ袋1枚程度。

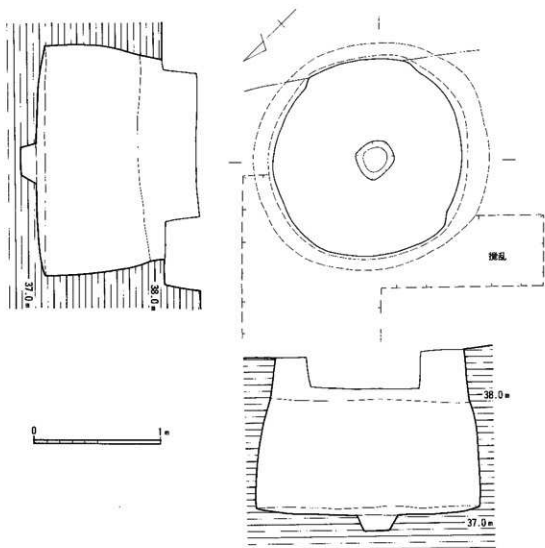
遺物(第23図18~20)18・19は甕の口縁部で、器面調整の確認できる18ではハケが施された後に沈線文が引かれる。20は復原口径22cmの壺であるが、沈線文や突帯文や段は見られない。

3号貯蔵穴(図版8・9 第22図)

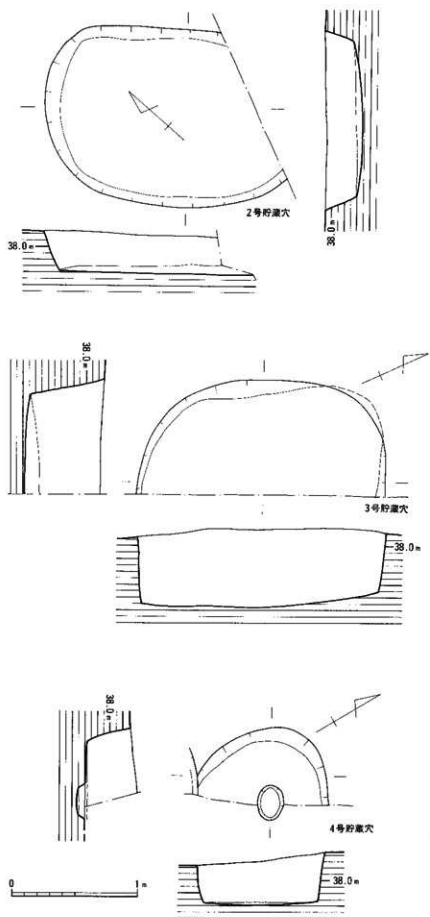
3号貯蔵穴は「L」字状調査区の南部分に位置し、2号貯蔵穴とは南側20cmの距離に接し、北東

部分では4号貯蔵穴を切るという先後関係を有する。全体の1/2程度は町道や塀によって削平されすに残っていないが、平面プランは径195cm程度の円形であったと考えられる。深さは最高で61cm。底面中央部にはピットを検出できていないが、本来存在しないのか、あるいは削平されて遺存しないのかは不明。北壁付近が一部オーバーハングするが、その他は直線的に緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色土で、底面付近には焼土や炭化物が薄く広がり、またこの底面付近でも壁際では比較的大きな破片の遺物が纏まって出土した。遺物の総量はパンケース1箱弱程度であるが、伊方小学校遺跡第3地点の4基の貯蔵穴の中では最も纏まった出土である。

遺物（第23図21～28・第25図3）21～24は壺で、22の文様は二枚目の腹縁を押圧して施したものである。23の頸部と胴部の境には突帯文が付き、外面にはミガキの痕跡が窺える。24は形態的に壺の底部であるが、外面は二次加熱により器面が剥落している。25～30の壺はいずれも摩滅が著しく、器面調整が窺えるのは25と30の外面のハケだけである。25については外面に厚く炭化物が付着しており、26・27・29には二次加熱による変色が窺える。第25図3は比較的に扁平な花崗岩の中央部が窪んだもので、作業台として使用されたものであろう。



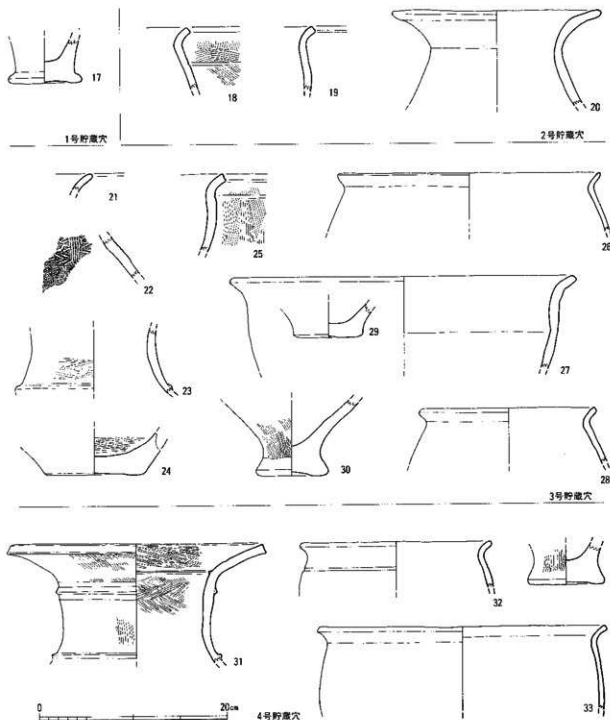
第21図 1号貯蔵穴実測図（1/30）



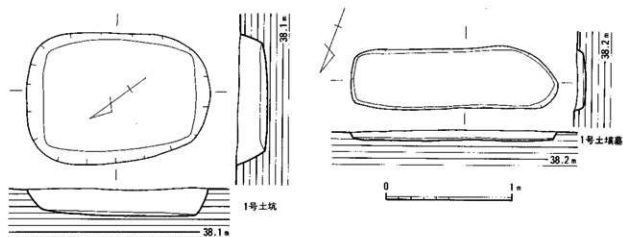
第22图 2~4号貯藏穴実測図 (1/30)

4号貯蔵穴（図版8・9 第22図）

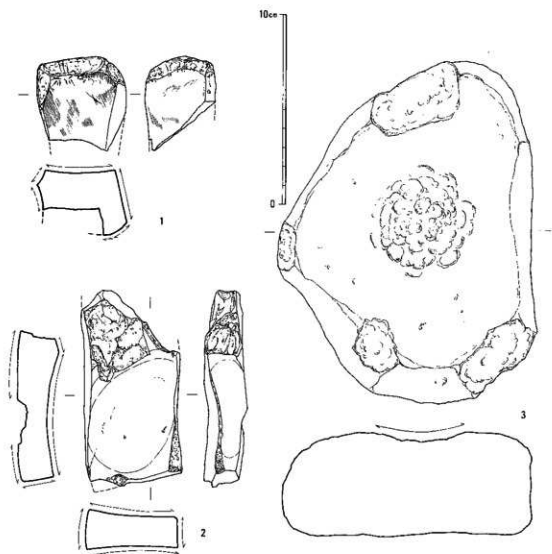
4号貯蔵穴は「し」字状調査区の南部分に位置し、北3mには1号貯蔵穴があり、南西部分では4号貯蔵穴に切られるという先後関係を有する。2・4号貯蔵穴と同様に町道や堀に削平されるが、平面プランは径110cm程度の円形であったと考えられる。深さは最高で38cm。壁は緩やかに開きながら直線的に立ち上がる。底面中央部には25×18×6cmの小ピットが掘られる。埋土は暗黄褐色土で、全体的に焼土や炭化物が少量含まれる。遺物は少なくボリ袋1枚程度。



第23図 1～4号貯蔵穴出土土器実測図（1/4）



第24図 1号土坑(左)および1号土墳墓(右)実測図(1/30)



第25図 伊方小学校遺跡第3地点出土石器実測図(1/2)

遺物（第23図31～34）31は復原口径28cmの壺で、外面には口縁部と頸部の境、頸部と胴部の境、さらには内面には口縁部と頸部の境にそれぞれ断面三角形の細くて小さい突帯文が貼り付けられる。器面調整はこれらの突帯文が貼り付けられる以前に、外面にはハケが、内面にはミガキが施される。口縁部は屈折して外反し、その端部には平坦面を作るのが特徴的。32～34は甕で、34のみ二次加熱による変色が窺える。

1号土坑（図版10 第24図）

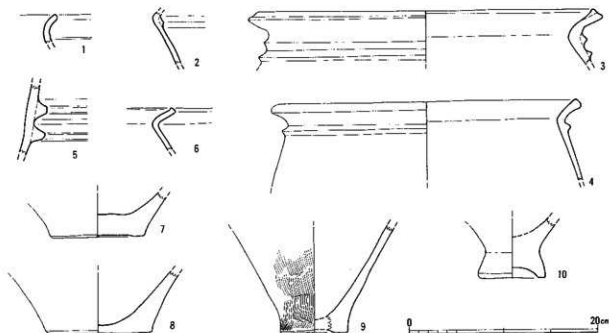
1号土坑は「L」字状調査区の南部分に位置し、東3mには1号貯蔵穴と近接する。97×70×15cmの隅丸方形を平面プランとし、埋土は暗灰褐色土で他の遺構とは異なる。遺物は摩滅の著しい弥生土器の小破片が10点ほどにすぎず、図示できるものではなかった。本土坑の性格や細かい年代については不明。

1号土墳墓（図版10 第24図）

1号土墳墓は「L」字状調査区の北部に位置し、北西4mには弥生時代後期後半の1号竪穴住居跡がある。109×33×6cmの隅丸長方形を平面プランとし、埋土は暗黄褐色土。遺物の出土はまったくないが、平面プラン・規模・埋土等の特徴は伊方小学校遺跡第2地点の弥生前期末の土墳墓と酷似しており、したがって本遺構も同時期の土墳墓と考えられる。

1号溝（図版6 第18図）

1号溝は「L」字状調査区の屈折部に位置し、北東-南西方向に走行し、幅40cm、深さ30cmを測る断面「U」字状。遺物は摩滅の著しい弥生土器の小破片が10点ほどにすぎず、図示できるものではなかった。埋土は暗褐色粘質土で、締まりは比較的良好。



第26図 伊方小学校遺跡第3地点周辺採集土器実測図（1/4）

5. 伊方小学校遺跡第3地点周辺の採集遺物

町道、広谷-犬星線上で、伊方小学校遺跡第3地点の北東20m付近(第4図)では、昭和60年頃に町道の歩道と小学校の塀を構築する際に遺物が出土しており、その一部が方城町中央公民館に保管されていた。ここでは実測可能な10点を紹介したい。弥生時代中期後半の遺物が比較的纏まっており、弥生時代前期後半と後期後半が主体の伊方小学校遺跡第2・3地点に近接しながら異なった年代の弥生土器が出土したことは注目される。なお、これらの遺物が出土したとされる地点は、今回の町道拡幅工事の対象地であったため事前に試掘調査を実施したが、すでに大きく削平されて遺物や遺構はまったく確認できなかった。

遺物(第26図)1は甕の口縁部で、沈線文が1本施されることから弥生時代前期後半に属しようか。2～5は弥生時代中期後半の甕で、「く」字状に屈曲する頸部には断面三角形の突帯文が、胴部には断面「コ」字状になる2条の四角い突帯文がそれぞれ施される。口径は35～38cmで、口縁端部は厚くなって平坦面を作る。6も甕の口縁部であるが、端部は摘み上げられるのが特徴。7・8は甕の底部か甕の底部か不明。9・10は甕の底部で、10については完全な上げ底になっている。

6. まとめ

(1) 伊方小学校遺跡第2・3地点について

伊方小学校遺跡第2・3地点は、町道、広谷-犬星線の拡幅工事に伴う事前調査である。いずれも諸事情により工事と並行した発掘調査であったが、関係各所の多大な協力とご配慮により、最低必要限の記録保存は実施することができた。

伊方小学校第2地点と第3地点は距離にして約30mほどしか離れておらず、また遺構と遺物についてはその性格と所属年代が共通するものもあり、本来は同一の遺跡であったと考えられる。したがって、ここでは両遺跡を纏め合わせた状況について概観してみたい。

弥生時代前期後半の遺構としては、貯蔵穴7基、土城墓5基、溝2本があげられる。平成7年度に調査を実施した、本遺跡群の南南西約250mの法華屋敷遺跡(水ノ江編1996)でもほぼ同時期の貯蔵穴5基しか確認されておらず、未だ当該期の住居跡は未発見である。調査面積が狭いこともその要因であろうが、削平により遺存していない可能性も少なくない。貯蔵穴についてはいずれも緩やかな袋状を呈しており、形態的にはかなりの企画性が窺える。ただし、第2地点の1・2号貯蔵穴のように本来の機能が終了した時点で、遺物の廃棄土坑的な性格を有しているものもあれば、第3地点の1～4地点のように機能が終了した時点で人為的に埋め戻したと考えられるものもあり、その違いが何に起因するものかは不明である。第2地点の1号土城墓からは磨製石鏃(第17図1)が1点出土したが、これは戦争等によりある人物が弓矢を受けたまま死亡・埋葬されたことを想定させる。筑豊地域としては嘉穂郡穂波町スグレ遺跡の有名な例があるが、彦山川流域では初例である。ある意味では当然のことではあるが、やはり彦山川流域(田川地域)でも弥生時代に戦争があったことを物語る資料として注目したい。

第3地点では、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が全体の1/4程度ではあるが検出された。年代的に方城町では初めて確認された遺構であるが、住居跡としても初例であり注目される。ベッドと屋内土坑を有する2本柱の長方形プランで、弥生時代後期後半の竪穴住居跡としては福岡県全体においても普遍的特徴を見せるものである。遺物は住居廃絶後に投棄された状態ではあるが、比較的纏まった出土を見せており、今後の当該期上器の地域性等を考えるうえで重要な資料になる。平成7年度に報告した、草場遺跡採集の内面に朱（おそらく水銀朱 第18図5・6）が多量に附着した2点の甕と同時期の資料であり、これらが帰属する遺跡が近辺に存在することを証明した意義は大きい。

また、第3地点の北東約20m付近では、第2・3地点では確認できなかった弥生時代中期後半の土器が採集されている。このことを考慮するなら、伊方小学校遺跡等が立地する伊方地区の丘陵は弥生時代全般を通じて人間の痕跡が確認できたことになり、さらには本報告書に掲載している宝珠遺跡や三本松古墳群をはじめ県指定史跡伊方古墳（7世紀前半代?）の存在から、古墳時代にもそれが継続されたことが窺える。周辺地域の発掘調査が十分に実施されていないため今後課題を残すが、おそらくこの伊方丘陵は、弥生・古墳時代を通じて彦山川下流域の中心的存在であったことが想定されよう。

なお、伊方小学校遺跡第2・3地点については、方城町建設課と教育委員会との協議により、調査終了後にその存在と内容を紹介する説明板が設置された。文化財の保護と公開という点については十分な方法であり、今後もこのような対応を積極的に推し進めていきたい。

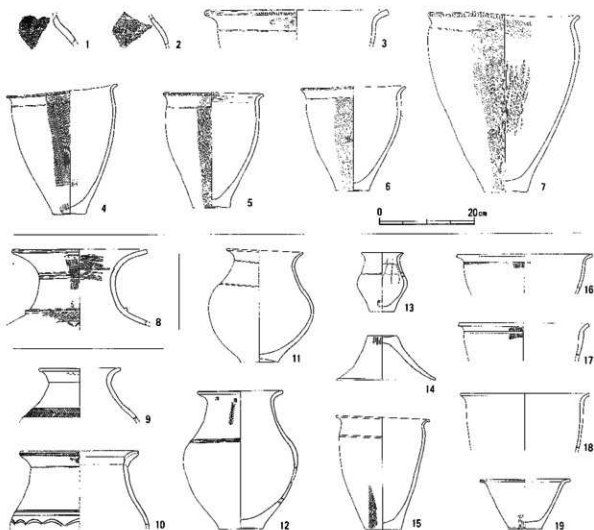
(2) 伊方小学校遺跡第2・3地点および法華屋敷遺跡

出土弥生時代前期後半土器の位置づけ

伊方小学校遺跡第2・3地点では、合計7基の貯蔵穴からパンケース15箱分の弥生時代前期後半の土器が出土した。これらは出土量の割には年代幅の短い纏まった様相を呈しており、また平成7年度に調査・報告した同町内の法華屋敷遺跡（伊方小学校遺跡第2地点の南南西約250m）出土土器ともほぼ同様の様相を呈していることから、ここではこれらを纏めてその性格づけを若干試みるものである。

本書で報告してきた伊方小学校遺跡第2・3地点の貯蔵穴出土弥生前期後半土器の特徴を纏めると次のようになる。壺については、比較的強く張る胴部の割には頸部は短く、そこから口縁部は外側へ大きく開く。口縁部と頸部の境には、内面では段・沈線文・突帯文によってその境が表現され、外面でも沈線文や突帯文によってやはりそれが表現される。頸部と胴部の境についても、外面では同様である。その下位、すなわち胴部上半部には羽状文や重弧文が沈線文や二枚目押印文によって表現される。甕はいずれも如意形口縁で、その端部に刻目が施されるのは全体の5%に過ぎない。頸部は無文が主流となるが、1本の沈線文が施されるものも少なくない。ただし、頸部には刻目の有無に拘らず突帯文が貼り付けられるものはまったく存在しない。底部については、その端部がやや開いて尖るのが特徴的で、わずかに上底になる。以上のような特徴は、第27図1～7に示すように、平成7年度に調査・報告された法華屋敷遺跡でもほぼ同様の様相を呈しており、またその報告で紹介した前村遺跡採集土器（第27図8）もこの範疇に属する。

ここで最も注目すべきことは、甕の頸部に突帯文が貼り付けられる資料がまったく存在しないことである。従来より、弥生前期土器の甕の頸部文様として、無文・沈線文・突帯文の三者が共存するものと考えられている。実際に、筑豊地域でも当該期の貯蔵穴はすでに何百基が調査・報告されているが、ほとんどの場合、頸部に突帯文が貼り付けられる資料が含まれる。唯一、嘉穂郡桂川町影塚東遺跡の5号袋状堅穴出土資料（第27図9～19）が例外的に存在していたが、他に類例がなかったためかほとんど注目されていない。しかし今回、伊方小学校遺跡第2・3地点の5基の貯蔵穴出土弥生土器をはじめ、近接する法華屋敷遺跡の5基の貯蔵穴からもほぼ同様の特徴を示す土器群が出土している。したがって、頸部に突帯文を施さない土器群が一時期を画する可能性が想定される。そうするとこの一群は、型式学的には突帯文を頸部に貼り付ける一群が主流となる中期初頭土器群におよそ先行する要素と認識することはできるが、甕だけでの年代的・編年的位置づけは難しい。そこで表を見れば、山口県下関市綾羅木遺跡の綾羅木式の中でも比較的古い段階のもの、福岡県行橋市下種田遺跡の下種田式の中でも比較的古い段階のもの、北九州市高津尾遺跡の高津尾期の中でも比較的古い段階のもの、田崎博之の板付式中段階に、吉留秀敏の7式もしくは8式に、それぞれ相当するものである。これら壺の特徴から見ても、いわゆる中期初頭とされる土器群より若



第27図 法華屋敷(1～7)・前村(8)・影塚東(5号袋状堅穴9～19)遺跡出土弥生土器(1/8)

千古く位置づけることが妥当と考えられ、したがって本報告では弥生時代前期後半土器として年代的な位置づけを試みた次第である。

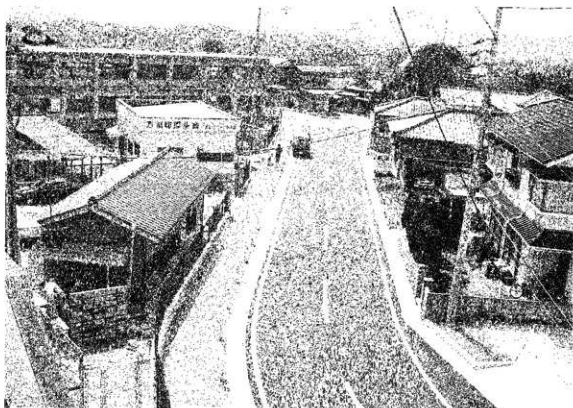
壺の頸部に突帯文を施さない土器群（段階）が筑豊地域（遠賀川水系の中・上流域－嘉穂・田川地域）に存在することは間違いなく、この地域の一つの地域性と考えられる。特に、今回問題となる彦山川流域の当該期資料の周辺地域との関係・系譜については、壺の比較的強く張る胴部の割には頸部は短く、そこから口縁部は外側へ大きく開くという特徴から、福岡・嘉穂地域というよりも、北九州・豊前地域に近い。また、壺の底部が開いて尖るという特徴についてもほぼ同様のことがいえる。だからといって、北九州・豊前地域のそれとまったく同じ土器群かといえばそうではなく、北九州・豊前地域から見れば福岡・嘉穂地域に近い特徴が目立つことになる。これこそが彦山川地域（田川地域）最大の特徴であり、地理的な環境（位置関係）が大きく反映した結果として認識することができよう。したがって、以上のような特徴を有する地域性の強い土器群、すなわち伊方小学校遺跡第2・3地点や法華屋敷遺跡出土土器群を「伊方タイプ」として、年代的にも地域的にも他を画するものとして位置づけたい。

なお、筑豊地域では今回伊方タイプとした土器群に確実に先行する土器群が、一括資料としては確認されていない。断片的には散見されるが、未だこの地域の地域性を認識できる段階ではない。豊前地域の行橋市辻垣ヲサマル遺跡ではこれに相当する資料が纏まって出土しており、遠賀川水系の中・上流域でもいづれ確認されるはずであろう。

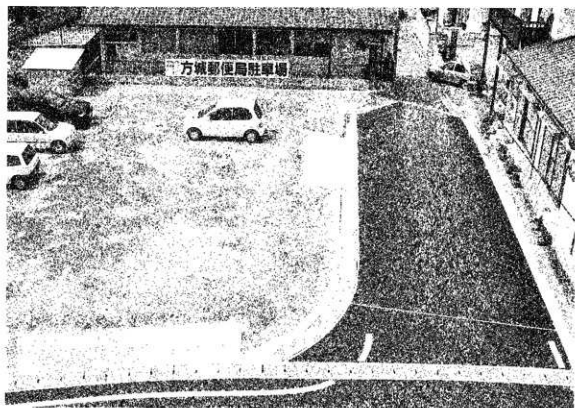
以上、伊方小学校遺跡第2・3地点の貯蔵穴出土弥生土器の年代的・編年の位置づけを行なうとともに、その地域性についても考えてみた。筑豊地域は発掘件数が他地域に比べて少ない割に、弥生時代前期後半から中期前半にかけての遺跡（特に貯蔵穴）が極めて多い。それだけに、この地域の地域性を明確に抽出することが、飯塚市立岩遺跡や嘉穂町鎌田原遺跡のような首長墓の出現要因の究明にも繋がるものと考えられるだけに、今後さらに注意を払っていきたい。

【参考・引用文献】

- 伊東照雄編 1981 『綾羅木郷遺跡Ⅰ』 下関市教育委員会
田崎博之 1994 「夜臼式土器から板付式土器へ」『牟田裕二君追悼論集』
長嶺正秀・末永弥義編 1985 『下稗田遺跡』 下稗田遺跡調査指導委員会
中村修身編 1989 『高津尾遺跡—14地点—』 北九州市教育委員会
長谷川清之編 1985 『影塚東遺跡（弥生時代編）』 桂川町教育委員会
水ノ江和同 1996 『法華屋敷遺跡・伊方小学校遺跡』 方城町教育委員会
吉留秀敏 1994 「板付式土器成立期の土器編年」『古文化談叢』32



伊方小学校遺跡第2地点



伊方小学校遺跡第3地点

第28図 伊方小学校遺跡第2・3地点の現況（平成9年1月撮影）

Ⅱ ほうじゅ 宝 珠 遺 跡

1. はじめに

平成元年8月末、筑豊教育事務所へ田川郡方城町教育委員会から道路工事中に石棺が出土した旨の連絡があった。早速現地の確認を行ったところ、現場は昭和61年4月に民家地下げ工事中に内行花文鏡（この鏡については本書に付篇として報告している）が出土した地点から西へ70m離れた宝珠遺跡内で、現道路の北側が幅1.5m、長さ7mほど掘削され、その部分から石棺が3基むき出しの状態で露出していた。工事の主体は方城町建設課で、産炭地域開発就労事業による町道役場宝珠線道路改良工事に起因するものであった。

今工事が周知の遺跡内で、数年前に不時とはいえ石棺から鏡が発見されるなど重要な遺跡地であるにもかかわらず、町の事業でしかも事前の届出もなく文化財が破壊されたことは、まったく町の過失と言わざるを得ない。町建設課には、工事の一時中断と石棺の調査、および露出している石棺以外にも発見される可能性があったため、工事箇所内の試掘調査実施の申入れを行った。また、その協議のなかで、町道拡幅工事は次年度以降も継続されることが明らかとなり、今回の反省にたち工事予定箇所については事前に文化財の試掘調査を実施することも申し入れた。

今回ここに報告するのは、平成元年度から平成3年度にかけて実施した発掘調査についてであるが、平成3年度分の調査（調査地は方城町弁城宝珠2872）は、試掘の結果遺構が確認されなかったもので報告は省略する。

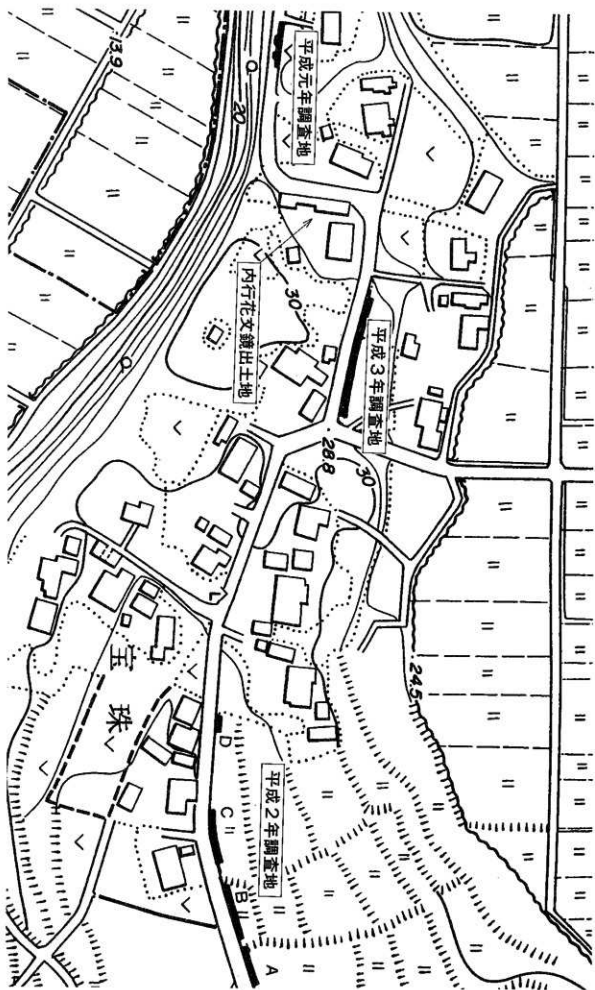
各年度の発掘調査期間と組織は以下のとおりである。

平成元年度	平成元年9月4日～9月11日	平成元年度	平成2年度	平成3年度
平成2年度	平成2年3月14日～3月20日	——	長尾智代喜	長尾智代喜
平成3年度	平成3年3月16日～3月18日	高橋 里治	仲村 興重	仲村 興重
総 括 方城町教育委員会	教育長	田島 靖	田島 靖	田島 靖
庶務担当	社会教育課長	皆川 和枝	皆川 和枝	皆川 和枝
	係長	係員 中山 正和	中山 正和	中山 正和
	係員	新原 正典	新原 正典	新原 正典
調査担当	福岡県教育庁筑豊教育事務所			

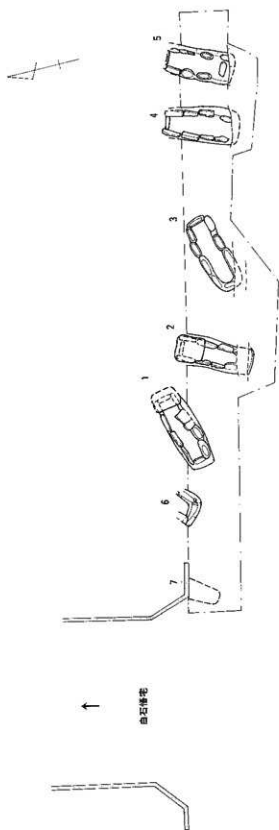
2. 発掘調査の記録

(1) 発掘調査の概要

宝珠遺跡は福岡県田川郡方城町大字弁城宝珠に所在する。遺跡は、遠賀川の支流の彦山川と中元寺川が合流する地点の東側に東西にのびる細長い丘陵上に位置し、丘陵南眼下には彦山川がつくる氾濫原が広がっている。この標高30m級の狭小な丘陵上からは、かつて人骨が出土した箱式石棺の報告があり、周知の遺跡として文化財分布地図に印されている。また、前述したように、昭和61年には丘陵中央部に位置する民家敷地の地下げ工事中に石棺や甕棺が発見され、石棺の一つからは内



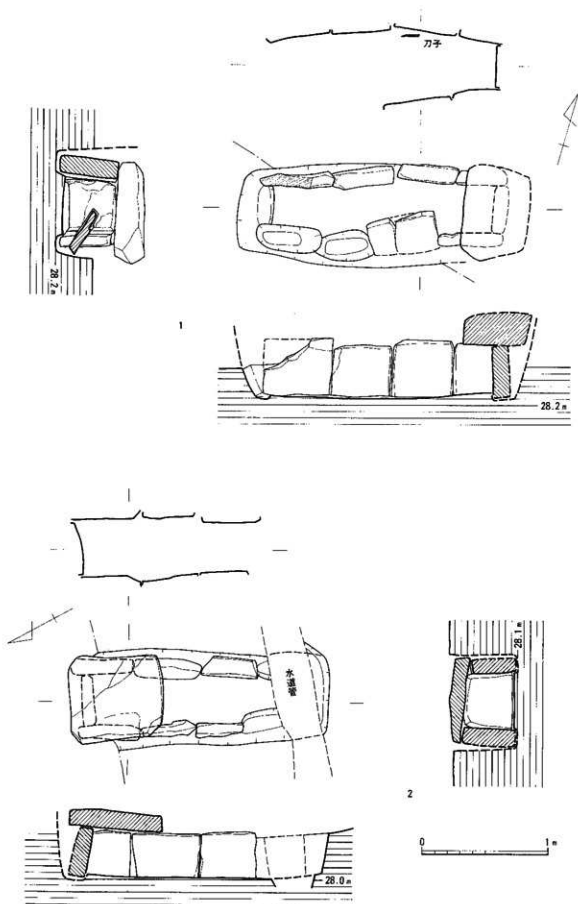
第29図 宝珠遺跡調査位置図 (1/1,500)



町道区画境界線

自治体界

第30図 平成元年度調査石棺墓群配置図 (1/100)



第31图 1・2号石棺墓实测图 (1/30)

行花文鏡1面が採取されている。一方、彦山川のつくる氾濫原は現在水田（標高14m前後）となっているが、昭和33・34年の石炭鉱害復旧工事の際に多量の弥生土器が発見され、その一部は町公民館に保管されている。また、明治末期に行われた彦山川河川改修の際にも、丘陵先端部付近に架かる宝見橋近くで石戈2本が出土している。このように、宝珠遺跡は丘陵上のみならず、その下の彦山川が流れる氾濫原からも遺構や遺物の出土が知られており、付近一帯が広がりをもった遺跡地であることが窺われる。

(2) 平成元年度の調査

前述したように、宝珠遺跡内での町道拡幅工事に係わる箱式石棺墓の発見が発掘調査の契機となった。工事は事業予定地内の両端部分については既に終了していたため、残り工事区間の試掘可能な箇所について約30mの区間で試掘を行ない、あらたに石棺墓4基を確認した。したがって、今回調査を実施したのは、工事箇所の中の中央付近の長さ約16m、幅約1.5mについての狭小な範囲である。しかも、調査では7基の石棺を確認したが、そのほとんどの石棺の北半部は工事区域外の民家敷地コンクリート壁壁下に埋没していたため、北側の十分な調査はできなかった（第30図参照）。なお、発掘調査地の地番は方城町大字弁城宝珠2840（図版21-1）である。

1号石棺墓（図版16、第31図）

調査区の中央よりやや西寄りにて出土した石棺墓で、石棺の蓋石や側壁の一部が損壊し、北端は民家敷地内に埋没したままで、すべて掘り上げることは出来なかった。北側壁は4枚の厚手方形板石で構成されている。南側壁は2枚の板石が残存し、うち1枚は動いて内傾しているが、墓底面の掘方跡から本来は4枚であったことが知られる。使われている石材は花崗岩や砂岩で、北側壁の1枚だけは変成岩である。また、蓋石は東小口側の1枚しか残っていないが、側壁の石材より厚手である。石棺の主軸方位はN-74-Eで、東西方向に延びる丘陵に對しやや東に斜交する方向に埋葬されている。これは他の6基の石棺についても概ね同様である。石棺の規模は内法で長さ178cm、幅は東小口で37cmだが中央部はやや広がる。深さは42cmを測る。壁内面および棺底面には赤色顔料の痕跡が認められた。なお、棺東寄りの底面北側壁際にて、刃部を側壁、柄部を東小口側に向けた副葬鉄刀子が1本出土した。

1号石棺墓出土刀子（図版19-3、第32図）

棺内副葬の鹿角装柄の鉄製刀子である。茎尻は折れていると思われ、現存長で13.7cmある。刃部長10.5cm、刃部最大幅1.8cm、背最大幅0.4cmを測る。反りは背部側にゆるく内弯する外反りで、刃はよくわからないが片刃であろうか。柄部の片面には鹿角が遺存している。



第32図 1号石棺墓出土刀子実測図（1/2）

2号石棺墓（図版17-1・2、第29図）

1号石棺墓の東2mに位置する石棺墓である。南小口は水道管の埋設により破壊されている。両

側壁は現状ではそれぞれ3枚しか残存しないが、底面の掘方から本来は各々4枚であったことがわかる。側壁は石材を横位に使い花崗岩や砂岩が多いが、安山岩も1枚ある。蓋石は北側の1枚のみが残り、硬質の砂岩である。石棺の主軸方位は $N-29^{\circ}-E$ にとる。石棺の規模は内法で推定長175cm、幅は北小口で45cm、南側で38cm、深さは40cmを測る。棺幅は南側へ減少しているため頭位は北で

あろう。周壁及び底面には赤色顔料の痕跡が認められる。副葬品等の出土はない。

3号石棺墓（図版17-3、第33図）

2号石棺墓の東2.5mに隣する石棺墓であるが、今回の道路工事とそれ以前の水道管敷設工事のため石棺材はすべて抜き取られ、墓底面の掘方がかろうじて残るのみである。その掘方からすると、北側壁は4枚、南側壁は3枚、両小口は1枚の石棺材が使われていたことがわかる。また、東小口の掘方底には砂岩の残片があり、東小口には砂岩が使われていたらしい。残った底面掘方からみた石棺の主軸方位は $N-72^{\circ}-E$ で、規模は長さ180cm、幅45cm程度である。棺底面には赤色顔料の痕跡が残る。副葬品等の出土はない。なお、3号棺は1号棺と同様に他の石棺墓とは主軸方向をやや異にして埋置されている。

4号石棺墓（図版18-1・2、第33図）

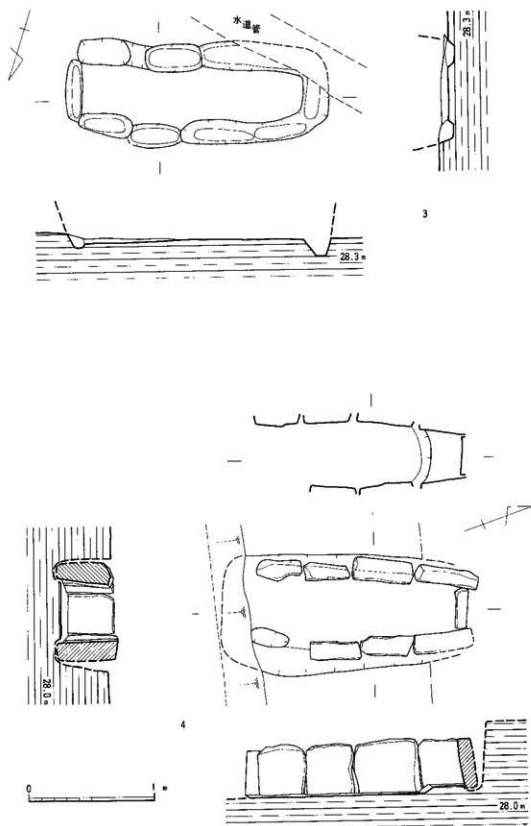
3号石棺墓の東3mの位置にある石棺墓で、北小口は民家敷地内に埋没し、南小口は水道管敷設により破壊されている。石棺の蓋石はまったく残存せず、両側壁は各々4枚の方形板石が使用されるが、東側壁の1枚は抜かれて欠損している。板石は花崗岩が多く、砂岩も少し使われている。石棺の主軸方位は $N-18^{\circ}-E$ で、規模は内法で推定長約160cm、幅は35~52cmで中央部が最も広く、深さは43cmである。棺底面では北小口付近が高さ4~6cm、奥行き25cmの範囲で一段高く削り残されている。枕であろう。周壁及び底面には赤色顔料の痕跡が見られる。副葬品等の出土はない。

5号石棺墓（図版18-3、第34図）

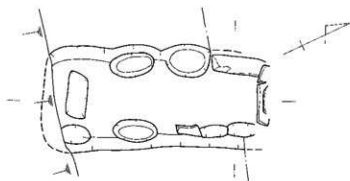
調査区内の最東端にて発見され、西隣の4号石棺墓と対になるような位置に埋置された石棺墓である。石棺は北小口付近を一部残すのみで、ほとんど破壊されている。北小口壁は1枚の砂岩板石を縦位に据え、西側壁との隙間を片岩で補っている。西側壁は北位の1枚のみ残存し、花崗岩板石を縦位に用いている。周壁への棺材の使用は底面に残る掘方跡からすると、南小口は1枚、西側壁は4枚、東側壁は4~5枚の板石が予想される。石棺の主軸方位は $N-25^{\circ}-E$ で、規模は内法で長さ133cm、北小口幅38cm、深さ48cmを測る。残存する2枚の周壁と棺底面には赤色顔料の痕跡が認められた。副葬品等の出土はない。

6号石棺墓（図版19-1、第34図）

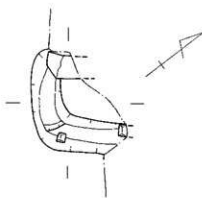
調査区の西側に発見された石棺墓であるが、大半が民家敷地内に埋没しているため石棺南端の一部を発掘したのみである。この部分では蓋石もなく、小口1壁と東側壁の棺材も抜かれていた。現状で確認できた2枚の側壁石材は砂岩と花崗岩で、この側壁と棺底面には赤色顔料の痕跡が認められた。



第33图 3・4号石棺墓尖测图 (1/30)



5



6



第34图 5·6号石棺墓实测图(1/30)

7号石棺墓（図版19-2、第30図）

調査区の最西端にて、地山に赤色顔料の痕跡が長さ90cm、幅40cmの長方形に染み込んでいるだけであった。石棺材のすべてが抜き取られたものであろう。一応、7号石棺墓として取り扱った。

(3) 平成2年度の調査

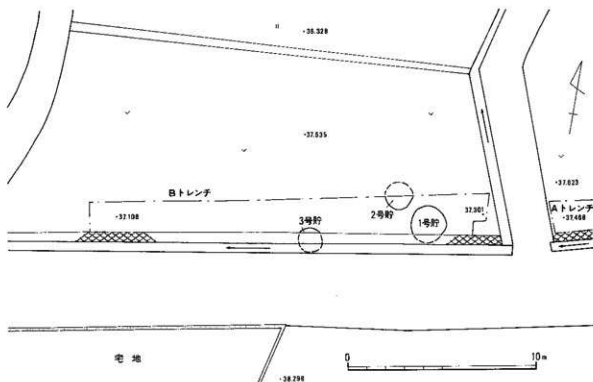
平成元年度に引き続き、平成2年度工事として宝珠遺跡内で町道拡幅工事が計画されたので、今回は前年度の無断工事を繰り返さないよう、工事前に試掘調査を実施し、遺構が確認された場合には発掘調査を実施することで、町建設課と十分な協議を行った。平成2年度の工事予定地は、昨年度に実施した地点から東へ300mほど離れた地点で、宝珠公民館の西側にあたる。現道路沿いの北側工事予定地の畑地や水田にA～Dの4本の試掘溝を設定した。A・C・Dのトレンチでは遺構は確認されず、Bトレンチにて3基の貯蔵穴を確認し、本調査を実施した（第35図参照）。発掘調査地の地番は方城町大字弁城宝珠2553-1である。

1号貯蔵穴（図版20-3、第36図）

トレンチ内の東半にて検出したものであるが、貯蔵穴の南端は現道の石垣下にかかっているため1/4程度は未掘である。貯蔵穴の平面形は円形で、規模は直径169×171cmの正円に近い。底面も上面と同じ正円形で、径は176cm×178cmを測る。深さは69cmで、底面は黄白色粘質土に掘り込まれ、平坦である。壁はやや内湾気味に立ち上がり、断面は袋状となる。貯蔵穴内は暗茶褐色粘質土の堆積で、底面からの湧水がひどかった。底面近くから少量の弥生土器が出土した。

1号貯蔵穴出土土器（第37図1～3）

1～3は1号貯蔵穴出土土器である。1は甕口縁部で、如意形をなす。器面の磨滅が著しく口唇部に刻み目が付くかどうか不明だが、口縁端部下3cmのところには1本の沈線が巡る。外面は黒灰



第35図 平成2年度調査Bトレンチ遺構配置図（1/200）

色、内面は黄褐色を呈する。胎土には雲母や砂粒が含まれている。2・3は底部だが、壺か甕か判然としない。外面は加熱により赤褐色に変色している。とすれば甕底部であろうか。胎土には雲母や角閃石が含まれている。3の底面端部は磨滅がひどく丸くなっている。

1号貯蔵穴出土石器（第38図-1）

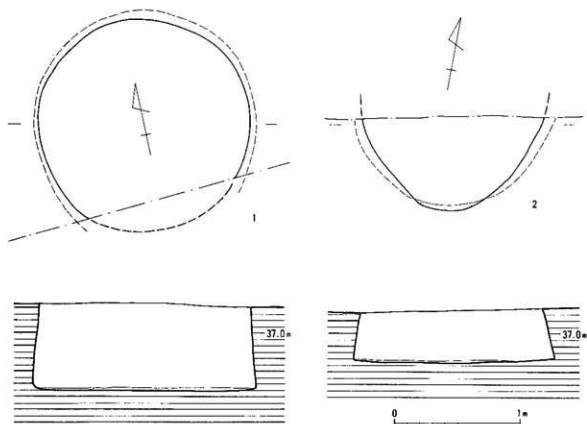
硬質の砂岩製砥石で木目は細い。小片のため全容は不明だが図示した下端面以外も使用面が見られる。手持ち用の仕上げ砥か。

2号貯蔵穴（図版20-3、第36図）

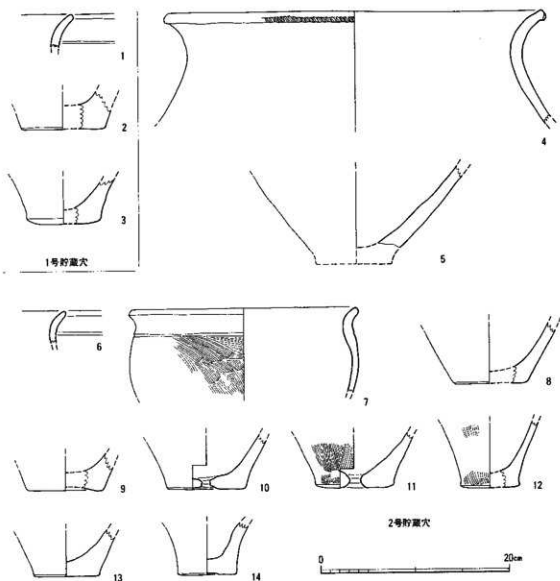
1号貯蔵穴の北西1.5mにて出土した貯蔵穴である。この貯蔵穴も北半が工事範囲外にかかっているため、1/2しか調査できなかった。貯蔵穴の平面形は円形で、規模は直径150cmの円形。底面も上面と同じ円形で、径は160cmを測る。深さは41cmで、底面は黄白色粘質土に掘り込まれている。平坦である。壁は内湾気味に強く立ち上がり、断面は袋状となる。底面近くから少量の弥生土器が出土した。

2号貯蔵穴出土土器（第37図4～14）

4と5は同一個体の口縁部と底部で、4の口縁部は復原口径約40cmを測る大型の壺である。肩部から緩やかに伸びた頸部は短く、口縁部は強く外反する。口唇部下端には3～4ミリ間隔で太くて深い右下がりの刻み目が施される。器面は磨滅がひどく調整は不明である。淡黄褐色を呈する。胎土は精選され、雲母や大粒の砂粒を含んでいる。5の底部は底面から6cm高の部分まで完形で残っているが、底面は剝離により欠落している。器面や胎土は4の口縁部と同様である。6・7は如意



第36図 1・2号貯蔵穴実測図（1/30）



第37図 1・2号貯蔵穴出土土器実測図(1/4)

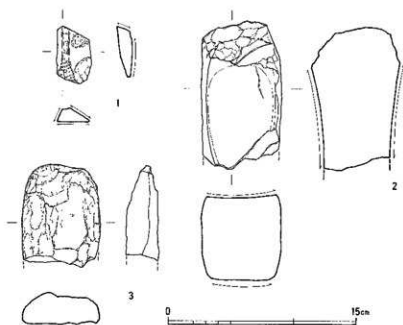
形の甕口縁部である。6は磨滅がひどい。7は今回出土甕のうち唯一復原口径がだせるもので、約24cmを測る。口縁部の屈曲は強く短い。口唇部の刻み目は現状では見られない。口縁部下2.5cmのところに1本の沈線が巡る。胴部の張りは強く膨らむ。外面の器面は全体に右下がりのハケ目調整、内面はナデである。色調は外面は灰褐色、内面は淡黄褐色である。胎土には雲母や砂粒が含まれている。8～14は底部で、8・9は壺、10～14は甕の底部であろう。また、10・11は底面中央が焼成後穿孔されており甕として使用されたもので、外面は加熱により赤褐色に変色している。また、9・13の外面も赤褐色に変色している。14の底部は底径約6cmと小型で、立ち上がりも強い。

2号貯蔵穴出土土器(第38図-2)

現存長約11cm、中央断面では約6.5×6cmを測る大型の磁石で、下端は折損している。また、図示した表裏2面を使用しているが、裏面は凸凹である。硬質砂岩製で、木目は粗く大型であることから荒砥であろう。

A トレンチ出土石器
(第38図-3)

A トレンチの試掘では遺構は検出できなかったが、耕作土から打製石斧1点が採取された。短冊形の打製石斧で、緑灰色を呈する結晶片岩製である。現存長約8.1cm、幅6.2cm、厚さ2.5cmを測る。下端の刃部は折損している。裏面の剥離は粗い。なお、石斧は二次的加熱を受けたらしく白色に変色している部分がある。



第38図 貯蔵穴・トレンチ出土石器実測図(1/3)

3. 小 結

今回の調査は発掘面積が狭く、おおまかに宝珠遺跡の東西2ヵ所にトレンチを入れたような結果になったが、東側で弥生時代前期の貯蔵穴群、西側で弥生時代後期の箱式石棺墓群が確認され、弥生時代でも時期の異なる集落跡と墓地群の存在が明らかとなった。

東側で発見された3基の貯蔵穴は少量ではあるが土器が出土し、それらの時期から貯蔵穴は弥生時代前期末の所産と考えられる。さらに、貯蔵穴は周辺部にも拡がっており、それらを営んだ人々の住居跡の発見も期待される。

西側にあたる丘陵の先端部寄りの調査では箱式石棺墓が確認された。石棺墓は7基と少ないものの狭い調査区内での群集密度は高いものがあり、その分布範囲はさらに拡がるものと予想される。石棺墓はほとんどが損壊し全容が知られるのはなかったが、規模や埋葬方向もほぼ同じで、ある程度の規則性が窺われるようである。また、棺底面に枕を布設した4号石棺墓や、副葬品の鉄製刀子が出土した1号石棺墓は特筆されよう。特に、石棺墓からの刀子の出土は方城町内では初例であり、田川郡内でも糸田町松山遺跡、赤村合田遺跡につき3例目である。なお、今回出土した石棺墓の時期は、東70mの地点で内行花文鏡を副葬した箱式石棺墓が昭和61年に発見されており、これらを一群の石棺墓群とすれば、弥生時代後期後半から終末期にかけてのものと考えられる。

宝珠遺跡は、過去の工事等により出土品の内容は知られていたが、遺構等の実態については不明な点が多かった。今回の調査は、道路工事に起因する事後処理的な緊急の発掘で、調査範囲も狭く十分なものではなかった。にもかかわらず上記のような成果をあげることができ、宝珠遺跡の実態が少しは解明され、方城町の埋蔵文化財に貴重な資料を付け加えることができたのは幸とすべきであらう。

Ⅲ 宝珠遺跡発見の内行花文鏡

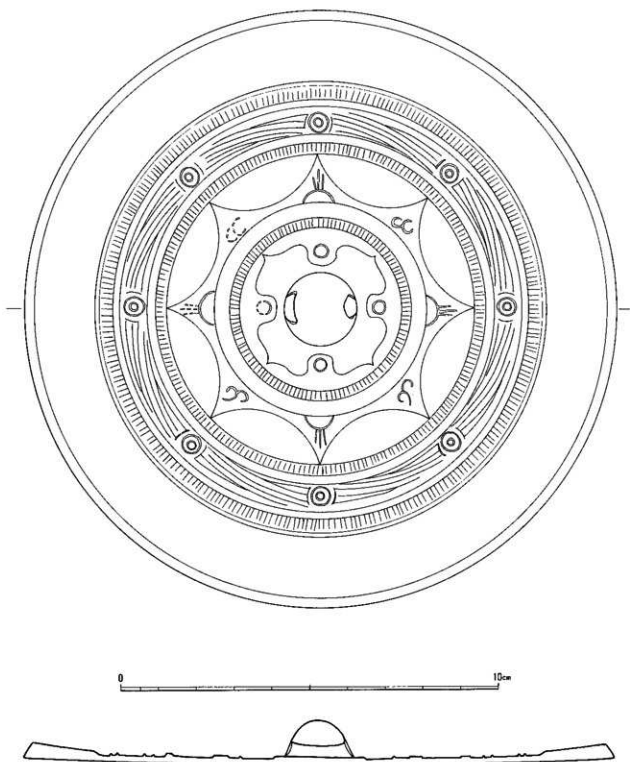
はじめに

ここに報告する内行花文鏡は、昭和62年5月14日、田川郡方城町の元教育長稲富明氏が「町内の工事現場から見つかった」と完形の鏡1面を筑豊教育事務所に持参されたものである。稲富氏によると、出土地は方城町宝珠の民家裏の畑地（本報告書第29図参照）で、地下げ工事中数基の石棺が出土し、そのうちの1つから鏡が発見された、と言うものであった。早速、方城町教育委員会と連絡をとり、現地調査をおこなったが、既に造成工事は完了し、庭隅には石棺材の花崗岩や砂岩板石が寄せ集められていた。板石で最も大きなものは67cm×108cm、厚さ20cmほどあり蓋石であろう。また、大型甕棺の破片も10点あまり採集された。土地所有者の香月ミサヲ氏の説明では、工事は石炭鉱害復旧にともなう地下げ工事で一ヵ月前の4月から着工し、ブルドーザーによる整地中石棺に当たり、その中から鏡が発見されたため元教育長の稲富明氏に届けたということであった。

香月氏によると石棺発見時の状況は、①工事中に石棺3基と甕棺1基が見つかった、②鏡が出土した石棺は3基のうち最も大きかった、③鏡の出土した石棺は朱塗りて他にはなにもなかった、④鏡は文様のある面が表であった、などであった。以上の聞き取りにより石棺等の配置状況を見取図にしたのが第39図である。なお、出土地は福岡県田川郡方城町大字弁城字宝珠2808番地（図版21-2）で、鏡は九州歴史資料館に展示、甕棺片は田川市石炭資料館に保管している。



第39図 内行花文鏡出土石棺墓配置略図



第40图 内行花纹镜实测图(1/1)



第41圖 内行花文鏡拓影（1/1）

内行花文鏡（第40～42図）

工事中に大型の石棺墓から出土した鏡は完形品で、四葉座を中心としてその外方に櫛歯文帯－圈帯－内行花文帯－櫛歯文帯－雲雷文帯－櫛歯文帯－平縁という鏡背文構成のいわゆる雲雷文内行花文鏡である。鏡面はほとんど緑錆で覆われ、部分的に白銅質の箇所が残る。鏡背は図示した左半部は淡黒灰色、右半部は緑錆に覆われている。鏡背の文様帯の彫りははっきりしているが、総じて平面的である。また、図示した左上半の内区付近は錆上がりがわるく不鮮明な箇所もあり。なお、鏡両面の所々には赤色顔料が僅かに付着している。



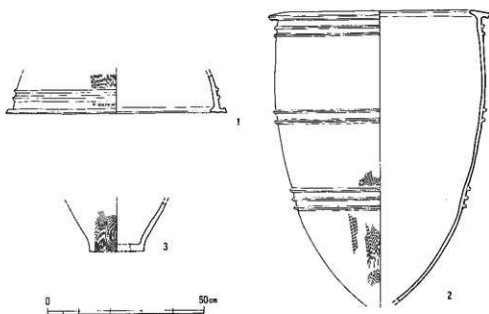
第42図 内行花文鏡写真

面径は15.6cm、鈕径1.9cm、鈕高0.95cm、平縁幅1.6cm、縁厚0.35~0.4cm、内区無文部厚0.2cm、鏡面の反り0.2cm、重さは318gを測る。鈕は高い半円形で総高は1.2cmを測る。鈕孔の断面形は半円に近い。鈕座は宝珠形の四葉文座で、四葉文の上半部は肉厚となり、基部の削り込みは互いに連続している。四葉文の弁間には「長宜子孫」などの四字句のかわりに○の円文が入る。鈕座と連弧文の間は平頂の圈帯で、その内側は櫛歯文となる。櫛歯文は圈帯に直行し粗い。連弧文は8弧で、連弧間には結目状文と山形文を交互に配置している。結目状文は退化してくずれ、釣針状の円弧を2個くっつけたような形となる。山形文は硬化している。雲雷文帯は渦文と斜角線文と櫛歯文からなる。渦文は二重の同心円と退化し、斜角線文は松葉状に二叉に分かれた線文を打ち替え、斜角線文の尾は右上左下がりである。櫛歯文は粗く直行している。外区は幅広い素文の平縁で、頂部は磨滅によるものか角がとれている。

甕棺 (図版21-3、第43図)

現地立会いの際、甕棺片が1数点採集された。土地所有者の話でも甕棺があったとのことで、採集された甕片がその甕棺墓であろう。ただ、それらを接合すると甕と鉢の2器種あり、実測図を第43図に掲載した。なお、復原図は反転したものである。

1は鉢形土器で下半部を欠く。復原口径70cmを測る。口縁部は逆L字状で内面に多少張り出す。口縁部直下に2条の三角突帯を巡らす。橙褐色を呈し雲母・赤褐色粒や小砂粒を多量に含む。焼成は良好である。2は砲弾形の甕形土器で、底部を欠く。復原口径70cm、現存高92cmを測る大型甕である。口縁部はT字状で外方へ低く傾斜する。胴部は長く上半部は直立する。口縁部直下と胴最大径の位置に2条の三角突帯を、胴下半にも3条の三角突帯を巡らす、いずれも磨滅がひどく原型を留めていない。胎土は1の鉢と同様で、色調は黄褐色から橙褐色を呈し、外面には黒塗痕跡が一部に見られる。焼成は良いが全体的に磨滅が著しい。3の底部は胎土・色調とも2の甕と同様で、甕の底部であろうが接合しない。復原底径18cmを測る。外面には黒塗痕跡が一部に残る。



第43図 甕棺実測図 (1/12)

以上の甕棺片は採集品のため出土状況は不明だが、採集品にはこれ以外の破片がないことから甕棺墓は1基のみで、上棺に鉢、下棺に甕を用いた大型成人用合甕であったことが推測される。この鉢と甕はともに橋口氏による甕棺編年のKⅢa式（弥生中期後半）に該当し（註1）、また、この時期から上棺に鉢や壺などの使用が始まることから肯定されよう。

おわりに

方城町宝珠遺跡において工事中に発見された内行花文鏡について見てきた。ところで、この内行花文鏡であるが、舶載鏡か仿製鏡かが問題となるであろう。つまり、四葉文の弁間が四字句ではなく卍文に置き換わっているからで、筆者の調べた範囲ではこの手の舶載鏡は知らなかった。しかし、鏡は緑錆をふいてはいるが白銅質の部分も残り鏡質は良く、また、鏡背の文様でみると、連弧間文様の結目状文はすっかり退化し、雲雷文帯の渦文も二重の同心円と簡略化しているが、これらは舶載鏡にも見られるところである。ここでは舶載鏡として報告しておく。

内行花文鏡については岡村秀典氏による詳細な分類編年がある（註2）。当鏡をその分類に当てはめると四葉座式鏡に該当すると思われるが、そのなかでも後出のものであろう。また、岡村氏は漢鏡を7時期に区分し、四葉座Ⅲ式内行花文鏡は漢鏡5期に出現し、後漢時代前期に比定している。

一方、こうした内行花文鏡はこれまで甕棺墓からの出土はなかった。しかし、平成2年に福岡市の飯氏遺跡群Ⅱ区7号甕棺墓にて副葬の初例が確認され、その7号甕棺は弥生時代後期中頃に位置付けられている（註3）。飯氏遺跡出土内行花文鏡は上記岡村氏分類では四葉座Ⅰ式に該当そうであり、宝珠遺跡出土鏡は飯氏遺跡出土鏡よりも2型式ほど新しいものであることから、鏡を出土した宝珠遺跡石棺墓の時期は弥生時代後期後半から終末の間に求められよう。

最後に、今報告は不時発見による内行花文鏡の報告であった。鏡を出土した石棺墓の詳細については不明と言わざるを得ない。しかし、鏡出土地から西70mの地点でも平成2年に7基の石棺墓が調査されて石棺墓の実態が少しは明らかとなった。これらを考え併せると、宝珠遺跡は広範囲にわたって石棺墓が埋葬される一大墓地群であることが判明し、そのなかには弥生中期後半の甕棺墓も混在するなど継続した墓地の造営が予想され、不明な点の多い当該期の墓制の究明が期待できる遺跡である。さらに、宝珠出土鏡と同種の四葉座内行花文鏡が田川市伊加利から1面、田川郡香春町宮原でも大小2面が石棺墓から出土している。この狭い地域に4面もの内行花文鏡が集中し、しかもすべて完形鏡であることは、弥生時代後期のこの地域における政治力と経済力の伸長を物語るものである。

宝珠遺跡は過去に幾度かの破壊を受けたが壊滅までには至らず、しかも、幸いなことに付近一帯の開発はまだ進んでいない。今後、計画的な発掘調査が実施されるならば、今回報告したより以上の成果が十分に期待される。町当局に対し一層の文化財保護行政をお願いしたい。

註

- 1 橋口達也「甕棺の編年の研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-XXXI-』

福岡県教育委員会 1979

- 2 岡村秀典「後漢鏡の編年」『国立歴史民俗博物館研究報告第55集』国立歴史民俗博物館1993

- 3 宮井善郎「飯氏遺跡群2」『福岡市埋蔵文化財調査報告書第390集』福岡市教育委員会1994

IV 三本松古墳出土内行花文鏡

方城町内では、本書で報告している宝珠遺跡の内行花文鏡以外に、もう1点内行花文鏡が昭和30年4月29日に出土している。写真等はすでに山回りその存在は広く知られているが、正式な報告は未だ成されていないので、ここで実測図や拓影を掲載する次第である。出土状況や正確な出土地点については不明な部分も多いが、ここではこの鏡について最も詳しく報じている『方城町史』（1969年 方城町史編集委員会編 pp42～45）の「三本松古墳」の説明文を原文のまま掲載したい。なお、昭和58年1月以来、この鏡は田川市石炭資料館に寄託・展示されている。

三本松古墳

『北九州郷土史研究』第三輯の遺跡地名表に方城村伊方炭坑構内、古墳、円丘、石塚と報ぜられているものと同一であろう。同炭坑のある大地の南斜面に二、三〇基あったという。現在は硬山の下になっている。この古墳群より出土したと称する青銅鏡を奥巧氏が所蔵されている（現在は奥氏より方城町に寄贈され町保管となっている）。遺物はこれ以外には不明である。石室は長側壁は各々二枚、短側壁は一枚で作られ天井部は畳一枚位の花崗岩を用いてあったらしい。内法で長さ約一・四メートル、巾約〇・八メートル。

内行花文鏡一面 径一〇・一〇、表及び背面に朱が附着している。

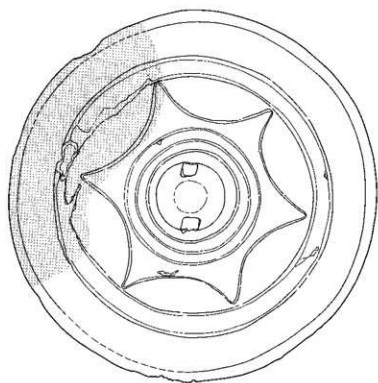
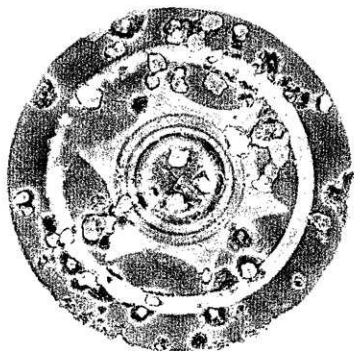
漆黒色の光沢を呈しているが、ところどころに緑錆が見られる。中国の後漢時代の鏡で銘文はないが舶載品である。この種の鏡が田川市東区伊加利・伊加利古墳より出土している。鏡径一八・六五釐で「長宜子孫」の銘文がある（東京国立博物館蔵）。

『方城町史』の記述によれば、三本松古墳は20～30基の円墳からなる古墳群とされる。ただし、現在の地形から判断する限り、ここに20～30基の古墳群があったとは考えがたく、おそらくは、箱式石棺墓群であったと推察されるが、『方城町史』の記述を尊重して、以下では古墳群という前提でその性格を纏めてみたい。所在地は方城町大字弁城字三本松である。

この内行花文鏡が出土した古墳の主体部については、側壁がそれぞれ2枚からなる箱式石棺墓で、1枚の花崗岩を蓋石としていたようである。この石棺の内法は1.4×0.8mを測り、長さの割には幅が広いことが指摘できるが、福岡市宮の前遺跡1号墳の1号箱式石棺墓（1.02×0.85m）や久留米市祇園山古墳墳頂部箱式石棺墓（2.00×0.75m）に類例が見られる。古墳の主体部が箱式石棺墓になる墳墓形態は古墳時代前期から中期中葉に見られるものであるが、このサイズの箱式石棺墓から判断して古墳時代前期に所属する可能性が窺える。

出土した内行花文鏡は、径9.7cm、平縁の厚さは3mm、最も薄い部分で2mmを測る。径1.8cm、高さ0.8cmの鈕の周囲には突縁が2本巡る。鈕自体には表面調整のための研磨痕が観察されるが、部分的に平坦面を作っている。

鈕孔の両端部は十分に調整が施されてはなく、4×5mmのやや歪んだ長方形であるが、中央部に向けて次第に狭くなり最終的には3×4mmになる。全体的に遺存状態は良好で、稜線も比較的シャープであるが、内区の6花のうち実測図の左上の2花分の7×3cmの範囲（第44図スクリーントーンの部分）については、稜線が不規則に蛇行したり、あるいは不明瞭になったり、あるいは面



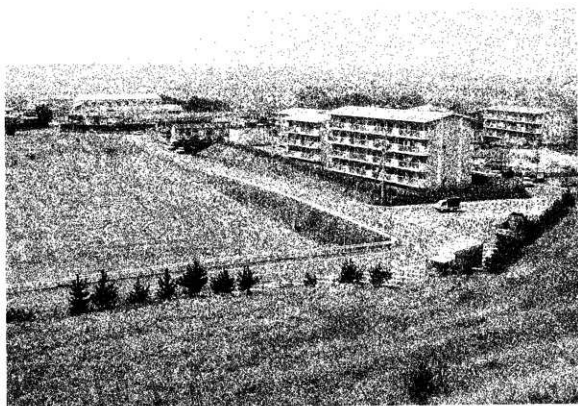
第44図 三本松古墳出土内行花文鏡拓影および実測図（1/1）

的に緩やかな凹凸が見られる。おそらくこの部分が湯口に相当し、湯冷えの痕跡と考えられる。また、実測図下側の花文には比較的大きな鉤型のキズが見られるが、細かいキズはこの他にも全体にいくつかある。重量は143gで、手に持った感じでは鏡径の割にはかなりの重量感を覚える。『方城町史』では朱の塗布が鏡の両面にあったとしているが、現時点でも両面にそれらしきものが痕跡的に観察される。岡村秀典氏の編年によれば、円座Ⅲ式に相当する後漢鏡（舶載鏡）であろう。

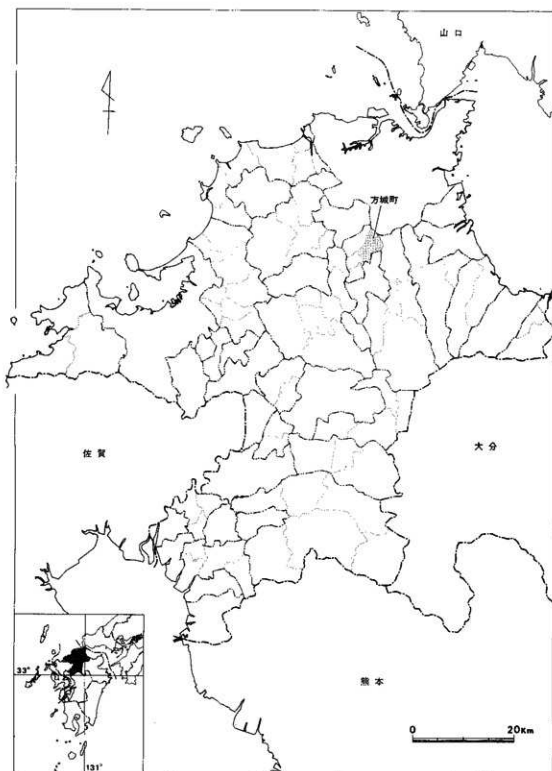
以上のように、古墳の主体部や鏡の特徴から判断して、三本松古墳群の中でもこの内行花文鏡が出土した古墳については、前期古墳の中でも田川盆地北部を制圧した首長墓の可能性が想定される。方城町の中でもこの伊方地区一帯の丘陵には、弥生時代前期以来、連綿と遺跡の構築が行なわれており、本書でも報告している箱式石棺墓から内行花文鏡を出土した宝珠遺跡や、全長11mにも及ぶ田川盆地最大の横穴式石室（7世紀前半）を有する伊方古墳（県指定史跡）も存在している。田川盆地における発掘調査件数は必ずしも多くなく、未だ実態の不明瞭な部分もあるが、いずれにせよ伊方丘陵の遺跡の内容は田川盆地北部のその他の地域に比べて傑出しており、ここが弥生・古墳時代の中心地であったことは間違いない。今後、さらなる資料の蓄積により、その実態がより明確になっていくであろう。

【参考文献】

- 方城町史編纂委員会編 1969 『方城町史』 方城町
 下條信行・沢皇臣編 1971 『宮の前遺跡（A～D地点）』 福岡県労働者住宅生活共同組合
 石山 勲編 1979 『祇園山古墳 九州縦貫道自動車道関係埋蔵文化財調査報告－XXVII－』
 福岡県教育委員会
 岡村秀典 1993 「後漢鏡の編年」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第55集



第45図 三本松古墳群跡地の現況（平成9年2月撮映）



第46図 方城町の位置